

---

# とあるチートを持って！

百合姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とあるチートを持つて！

### 【Zコード】

Z1936Z

### 【作者名】

百合姫

### 【あらすじ】

注・タイトル変更しました。

この物語は一次に良く見られる嘘ませ犬として出される性格の悪いオリ主が主人公であり、そんな主人公が改心したけれど前の評判が評判なだけに肩身の狭い思いをしたり、勘違いされたりの物語です。（予定では）

いまいちイメージがわかないって人はとりあえず読んで見ると良いと思うよ！

作者が現実逃避としてバカな作品を書きたいと思つたがゆえの投稿

です。ゆえにギャグティスト。シリアルスは・・・ないと思われ。

そして更新速度に過度な期待はしないでください。

なおかつジュエルシード事件のみで完結するかもしれません。

## ふるわーぐ（前書き）

始めに言つておきます。

感想などではオブラーートに包んでね。

作者は非常に打たれ弱いのです。

ふるわーぐは三ページ分くらい。

噛ませ犬的勘違い系主人公のアホな興味をお楽しみください。

まあそんなに量があるわけでもないんですけども。

プロローグが終わると勘違いから改心します。

それとおそらく下ネタはあまり無いと思います。今回がピークってくらいいかも。

今のところヒロインはいつそのヒトフライの母のプレシアにしてしまおうかとも思つていたりして。

レベル高すぎるかな？

そしてご都合主義は出来るだけ省きたいとは思つてます。期待はないで欲しいですが。

## ふるわーぐ

おっぱい。

ある人は言った。

それは神秘のベールに包まれた神々の宝玉だと。

ある人は言った。

そこに全てを置いてきた。探し出せ、その秘宝を、と。

ある人は言った。  
女体最高！！と。

ある人は言った。

胸とは。胸ではなくおっぱいである、と。

ある人は言った。

おっぱいを求めずして何を求める？

富か？名譽か？

否！！

男として生まれたからには至高のおっぱいを求めずして何とする。

ある人は言った。

おっぱいに何が詰まってるかだつて？

H A H A H A H A ! 何を今更なことを。

・・・ふつ。

浪漫が詰まってるのや。

ある人は言った。

いや、胸に詰まってるのは脂肪だら?...。

ある人は言った。

そういう夢の無い奴は腸をぶちまけて死ね、と。

ある人は言った。

人体の神秘。言い換えるならそれだね。と。

ある人は言った。

あの曲線美。柔らかわ。重量感。すべてにおいてマーベラス、と。

ある人は言った。

芸術はおっぱいだ!と。

ある人は言った。

小さなおっぱいも大きなおっぱいも等しく胸おっぱい。全てのおっぱいを私は愛そう、と。

『本当にそれで良いの?』

「ええ、もちろん。」

『男神じゃない女神の私には分からぬけど・・・そんなので良いの?』

「はい。」

『・・・ま、まあ頑張ってね?』

『ありがとうござります。俺、良い嫁さんを探します。』

『別にそんな決意を私に聞かされてもドウ答えれば良いか・・・』

『暗に貴方になつてくれないかな?と。』

『H A H A H A、無理。貴方みたいな変態、好みじゃないから。』

『し、失敬なつ!..』

揉むにしても決して無理やりには・・・』

『・・・はあ。とつとと行つて頂戴。気持ち悪いもの。貴方。

「ふふふふ。これで俺のオリ主ハーレムが・・・ぐふふふふ。』

『本当に気持ち悪い。・・・じゃあな。』

「はい、本当にありがとうございました。』

こうして1人の男。

オリ主でイケメンな彼が異世界でハーレムを作るべく頑張つてみる物語が始まる。

はつきり言おう。

彼のその夢はかなわないだろう。

なぜならば。

『・・・勘違い系オリ主ってところかしら。

あんなの好きになる子が居たら・・・不憫すぎるわ。』

この物語は勘違い系の彼が主人公の物語である。

最近の二次創作には転生オリ主の他にままオリジナル主人公が出てくるが、その中でもヒロインに纏わり付く嫌われ者の勘違い系の噛ませ犬オリ主。

この物語は、その噛ませ犬側の彼から見た物語である。

果たして彼はまともな主人公となりえることが出来るのか?  
気味悪がられずにヒロインに近づくことが出来るのか?

さてはて皆様。

「魔法少女リリカル　なのは」の世界によつこそ。

とある時刻、とある家庭にて。

ハイハイをする子供が居た。

もとい物語の主人公、相馬そつま響ひびきである。

見た目は銀髪にオッドアイ。

彼の前世の生涯が閉じたのは中学2年。

まさしく厨二病に疾患してピークに当たる時期である。

そんな頃合に死んでしまった彼がそんな見た目になるのは当然のことで、厨二病を脱する頃合。もとい7歳になる頃にはきっと自分の姿に悶絶するだろ?「なぜあの時に、こんな奇抜な見た目を選択してしまったのだ!...」と。

多分。きっと。おそらく。  
してくれると良いな。

現在の彼は早速発情していた。

「・・・ふふふふ。俺の母親がよもやこんなに美人だとは・・・近親相げふんせふんも、悪くは無い。

何、俺のイケメンを持つてすれば・・・」

ドンビキである。

生まれて数年で母親とのチヨメチヨメを考える人間。

あまりの非常識ぶりに本当に貴様、日本人か?と問いたくもなるのだが、自然界では親と子の交配は至極当然のようであるし、血統的にも問題は無い。

別に良いのでは?という気もしてきたのは、あまりの思考回路ゆえに彼を人間としてではなくその辺の獣と同列視してしまっていると

「あらへおっぱいが欲しいのかしら？」

あれでも彼は人間なのだ。  
それはさておき。

母親である相馬文香に遠慮なくむしゃぶりつけていたを見て戦慄しつつも思うのは、田が血走りすぎで怖いと言つてゐる。目が血走りながら乳房をしじきつ吸い付く赤子。下手なホラーよりも怖い。

「・・・・つかまつたーーー！」

と吼えながらも母親の乳房にがつつく響。

全国の赤子や君のような子供を産んでしまった文香に謝つてあげたいほどにその姿は醜かつたと言つておく。

これを見ても自然な笑みを絶やさないとは母親は偉大である。否、文香が偉大なのだろう。絶対。確実に。それしかない。きっとそう思つ。

そもそも彼の毛の色や田の色的にこれを我が子として愛せる彼女はまさに聖母と言えよう。

「・・・・くつ・・・・いかん、もはや眠くなってきた。」

今更であるが彼の言葉は全て「あー」とか「うー」とかである。赤ん坊なのだから当然のこと。

それを意訳してお茶の間に届けているこの作業。早くも苦痛と化してきたのだから気が滅入る。

そして彼はそのまま寝た。

寝る子はすくすく育つと「ひがい」のまま眠るよう死んでくれたほうが世のため人のため。

何よりも罪の無い母親が救われるような気がする。

「ふふふ・・・凄い旺盛な食欲ね。」

ちゃんと食べたのを見て安心したのか文香は満面の笑みを浮かべた。母親としては至極真っ当なセリフなのだが、それが向けられた相手が彼となると複雑な気分である。

・・・ここに、ここに聖母があるきん。眩し過ぎて目が開けられないとじやあ・・・

せめて彼女の元で彼が真っ当な道を歩めるよう、祈るしかるまい。余談ではあるが母子家庭で父親は蒸発済み。

あまり良い人ではなかつたそつうな。

## ふるるーぐ2（後書き）

全体的にプロローグは短いです。  
なぜかあまりネタが思い浮かばないもので・・・先のほう先のほう  
はガンガン思いついているのですが。  
よつて、ちやつちやと進めることにしました。

♪ルルルーブ (前書き)

これにてプロローグは終了。

## ふるわーぐ

子が育つのは早いと言つが、それを証明するが「」と、あつとこう間に9歳となつた響が居た。

彼が通うこの小学校にはヒロイン候補がいる。

言わずもがな、高町なのは、月村すずか、アリサ・バーニングスである。

もちろんのこと彼は煙たがられた。

なぜかと言えば単純明快。

変態でキモイからだ。

さらに言えば残念ながら厨二病は治らなかつた。

「やあ、アリサ、すずか、なのは。」

「お、おはよー。」

「・・・響君・・・おはよー。」

「いい加減殺したくなつてきたわ。」

にこやかな響の挨拶には、すずか、アリサはげんなりとして応える。

いや、アリサは応えてなかつた。いや、これはきっとアリサ流の返答なのだろう。

いいぞ、もつとやれ！！

大丈夫。ちょっとだけだから。ちょっと殺すだけだから。

今なら一万円上げるから。ね、ちょっとそこの人気の無いところに連れてつてさ。

こづ、サクつとね？

「今日も可愛いね。」

「あ、ありがとう。」

「そ、それでもないよ」

「・・・そんなことどうでもいいからとどどっか行つてくれない?」

なぜここまで彼が嫌われているかと言つとそれは彼のローブの目線である。

簡潔に言つとエロい。

人間といつのは鈍く見えても意外と敏感で、たとえば今日の前で起つてぐるぐる相手が下心を持つて近づいてくればもちろんのこと分かる。

目線で、もひバレなのだ。

じろじろと撫で回すような視線。

変態じやない彼女達にとつてそれは酷く不快感を与えるものだつた。そつした下心を隠せる巧妙な男もいるが、こちらほど性質が悪くないのが唯一の救いである。

「ていうか、あんたどうしていつもいつも私たちのところに来るのよ。毎回言つてるでしょー寄つてくるなつてーー！」

「ふつ、野に咲く可憐な花を見に来てしまつのは、美しき蝶の宿命さ。」

「はあ？」

「ふくつ・・・くくく・・・美しき蝶ね？」

「宿命とか・・・ふはつ！..」

失礼。つい失笑してしまつたのだが、次の問題がコレである。これまた簡潔に言つならば意味が分からぬことを言つてゐるといつだ。

思い出して欲しい。

彼女達は9歳児である。

そんな気障な話をされたといひで彼女達の脳内では「野に咲く花に蝶が寄つてくるのは当然のことだよね」とこいつそのままの字面で受けとつている。

すなわち。

「この話の流れでいきなり蝶の話をされても意味が分からんだけど?」

「おや? わからなかつたのかい?」

ふふふ、初心な子羊ちゃん達だ。」

「ああ、?」

アンタバカにしてんの?」

「あ、いや、そうではなくてだ。これは野に咲く可憐な花を君たちに例えて——ぶるはつ!-?」

「あ、アリサちゃん。さすがに殴るのは・・・」

「いいからいいから、ほら、とつとと行きましょ。」

「ぐふつ・・・シンデレラか。現実のシンデレラとはかくもシンディものなのだな。」

こうして彼の勘違には増えていくのだった。  
とこりか、もつとやつてくれないだろ?つか?  
もつと熱くなれよ!-!  
びつしてそこで去つちゃうんだ!-!  
あとちよつとで殺せるんだぞ!-!  
もつともつともつと熱くなれよ!-!

あ、良い忘れたが彼の口調にも問題はある。

何よりも致命的なのが彼のその勘違いスキルにあった。

彼が煙たがられているにも関わらず接触を持つとするのは、別に嫌われていることに興奮する性質を持っているわけではなく。ただたんに恥ずかしがっている、素直になれないだけと考えているからである。

すなわち。

嫌われているのにも関わらずしつこく空気の読めてない人間がこれまたしつこく話しかけてくる。非常に嫌な出来事と言えよう。

そして、そんな彼の行動はとある結果をもたらした。

「てめえ、いい加減にしろよ…なのは達が嫌がってるだろっ！？」  
「何を言う？」

君こそ彼女たちを開放したまえ。きっと君が脅しているのだろ？」「はあ、はあああっ！？」

そう、新たな転生者による苦情である。

彼は原作非介入派であまり下心を持たず、なんやかんやでなのは達に気に入られた転生オリ主。

なのは達に日々無自覚な嫌がらせをしつづける響に対しても文句を言いいに来たのだ。

なのは達がなんだかんだで響を退け切れないのは彼が生理的に嫌いでも悪人では無いということに起因する。

相手に悪気が無く、なんだかんだで直接的で決定的な害が無いために特別お人よしな彼女たちとしては彼を退け切ることは出来なかつたのだ。

そんな中立ち上がったのが、チートオリ主の彼、山田君（仮称）だ。

個人情報保護法のため、この場では仮名を使っている。

彼はいたつて普通の両親の元に生まれ、原作怖いとか良いつつもご都合展開によつてなぜかなのは達と近しい展開になつたといつ背景を持つ。正直此方のほうが我らがバカな主人公よりも腹だしい気がする。

原作介入したくないとか言つておいて、どうせがつたり介入するんでしょ？

フェイトの母親に「なんでフェイトを娘と見てやらないんだ！！」みたいな熱血な説教するんでしょ？

どの口で原作に介入しないとか言うのか。

いや、それこそが主人公体質と呼べるものなのかもしねり。

残念ながら響にはそれが無いようである。

そしてなぜか「名前で・・・なのはつて呼んで！」みたいなフラグを立てつつも現在、響にとつては程遠いチートハーレムを形成しつつある山田君。

今回の案件も彼の好感度はうなぎ登りで、響の好感度は格段に下がることとなるだろう。

山田君はきっと「かませ犬ありがてえ」などと思つてゐるに違ひない。

と言つたら彼は怒つてこういうだらう。

「ただあいつらの笑顔が曇るのが見過じせないだけだ！！」

はいはい。主人公やつてますねえ。

無欲アピールとか要らないです。

「は、話が通じねえ。」

「まあ君の気持ちも分かる。

だがね。彼女たちが迷惑してるのは歴然たる事実であつて——

「いや、だからオマエの行動が・・・」

その後、結局平行線のまま話は終わった。

そんなある日のこと。

彼の勘違いが解ける日がよづやく来たのである。

発端は放課後。

彼のチートの一つにおつぱいチートと呼ばれるものがある。彼が求めたチートで恐らく未来永劫誰も望まないであろうもなく見てそのチート内容とはおっぱいを自由自在に操ることにある。色々語りたいのは山々であるが、それは後の機会に譲るとして、話を進める。

そう。

あらうことか彼はなのはの——幼女の胸を揉みしだいたのだった。そこに至るまでの経緯はあまりに見つともなく、しうもなく見ていられなかつたので省くが年頃　　とまでは行かないが女の子が胸をイキナリ———それも嫌いな男に揉まれたらどうだらうか？もちろん怒る。

下手をすれば精神的な傷。もといトラウマも与えかねない。

彼はそんな致命的かつ最低なミスを犯してしまつたのである。

もちろん彼は無理やり揉むなどと言う外道ではない。

勘違い野郎ではあるものの、よくも悪くも日本人なのである。

悪人ではないし、そんなことを考えたことも無く、むしろ女性関係に関しては初心なくらいである。

歯の浮いたセリフを吐けるのも、彼女たちがまだ小さく、幼女だからであり、忘れているかもしれないが記憶を持つたまま転生した彼にとつては娘のような———歳の離れた妹のようなもの。

なんだかんだで別に欲情していたわけではない。  
といふか当然のことである。

しかし——いや、それがゆえに悲劇が起つた。

彼の認識ではあくまでも好かれていると思つてゐる。

なおかつ、自分よりもはるかに年下の——もとい今はまだ子供としてしか見てない、なのは。

彼は善意で将来的に胸が大きくなるようにチートを発動させておこうと思つたのだが、それが良くなかったのである。

とても身勝手で自己中心的な善意。

すなわちありがた迷惑は無常な現実として彼の身に迫つた。

大問題となつたのである。

まだ一次成長も迎えてないとはいへ女の子の胸をがつたり揉みしだいたことで親御さんにも伝わり、もちろん彼の母親の文香にも伝わつた。

なのははなのはで号泣。

先生にも伝わつたし、すずかやアリサは完全に軽蔑する眼差しをむけるようになり、彼の一切合切を無視。

なのははなのはでしばらくの休校の後、復帰。

彼を避けるようになつたものの、なんとか立ち直つたようである。

もちろんクラスのほかの子にも伝わり、あらゆる場面へと彼の行動の結果が伝播した。

虐めを心配した文香が転校を薦め、響も転校を望んだ。

そう。

彼の勘違いは1人の女の子を泣かせてようやく解けるほどに重症だつたのである。

もちろんのこと、彼は嘆いた。

泣きながらに謝つた。

許してもらおうだとかそんなことは微塵も考えず、ただただ申し訳なさで一杯でひたすらに謝つた。

もちろんのはの父親や他家族はそれで許せるはずも無いが、子供のやることとして許したと言つことになつた。

そうしたけじめを付け。

彼はなのは達が通う学校を後にした。

彼の後姿はまるで別人のようだったといふ。

## 主人公の一日（前書き）

このまま三人称でいくか、主人公視点にするか。迷い中。  
その件に関して感想をいただけると嬉しいです。

## 主人公の一日

あれから半年の月日が流れた。  
彼はと言つとそれはもつ、猛省した。

『大丈夫ですって。そろそろ頑張つてみましょ？』

「そうだらうか・・・アイシテル。俺は怖い。また大きな罪をこの手で犯してしまうのを・・・」

『はい、その言い回しは厨一くさいので直しましょうね。』

「・・・俺は厨二じやない。もう目が覚めたし。」

『厨二の人は誰もがそう言つる。』

今彼が居るのは自室。

神様から貰つたチート特典の一つ。

神様に用意してもらつたデバイス“アイシテル”と話している。二対のナイフ型デバイスであり、片方はベルカ式でカートリッジを搭載しているため、非常にゴツい。

もう片方はすらりと長いスリムなミッド式の魔法が組み込まれたナイフである。

近接戦や身体強化に置いて優れているベルカと、小手先や技術、手数の多さに優れているミッド式。

どちらの魔法も満遍なく十二分に使えるという特殊なデバイスである。

待機状態はナイフを模つたネックレス。服の下に入れておけば一番目立たない形である。

普通のインテリジェントデバイスよりは遥かに感情豊か。ちなみにドイツ語を喋つている。

良い機会なので彼のチートを振り返つてみた。

まず一つはその容姿。

銀髪オッドアイ。

しかし、これは現在では意味を成さなくなっている。  
アイシテルによる変装魔法で一般的な黒髪黒目の人間にしているの  
だ。

理由は言わずもがな。

二つ目は神様印のデバイス。

アイシテルの性能は下手なロストロギアよりも強力で、ジュエルシ  
ード並みの魔力貯蓄機能があつたりとチートらしいチート。なのだ  
が、どんなスーパー・コンピューターも扱う人が幼児並みの知識と能  
力値しかないので宝の持ち腐れ、豚に真珠、ぬこに小判、という  
もの。

一度もセットアップしたことが無い。

彼はこの世界について美少女がヒラヒラした服を纏つて飛び回る。  
程度の認識しか持つておらず（逆に言えば彼にとつてはそれが全て  
であり、それで十分だった）、そもそもデバイス自体この世界のコ  
ンピューターだとしか考えていらない。

もちろんこの時点からして勘違いなのは言うまでも無いことである。  
何が言いたいかと言うと、彼はデバイスを単なる便利な魔法が使え  
る生活を助ける道具、程度にしか考えておらず、戦いに使えるなど  
と微塵も灰燼も気づいていないのだ。

そしてそれを知りつつも面白そうだと言いつことで放つて置くアイシ  
テル。

これまた現状では使えないチートである。

三つ目は言わずもがな我らが夢。おっぱいチートである。  
よく考えて欲しい。

全てのヒロインに直面する絶対的な悲劇とはなんであろうか？

・・・ 引っ張る意味も大して感じられないのに早々に明かしてしま  
うが、それは「老い」である。

どんな可愛いヒロインも時が流れれば老化し、言い方は悪いが劣化  
する。

いつまでも若々しい姿で。

これはほぼ全ての——容姿に自信を持つ人間であるほど必ず抱く  
欲求の一つではないだろうか。

もちろんアニメを見ていると、いつ立場であるならばなんら問題は無  
かったのだが、同じ世界に現実として生まれた以上は、そうしたヒロ  
インの姿も見なければならない。

自然の摂理とは言え、それを解決する手段があれば望んでしまうの  
が人の業という物だ。

耳障りは悪いが、おっぱいチートはそんな夢を叶える最高のチートと  
言える。

劣化によって垂れるおっぱい。

垂れたおっぱいは一度と床らないと言つのが現在の学説で、事実そ  
うである、らしい。

巨乳キャラであればあるほど何十年後かにお世辞にも綺麗とは言え  
ない肢体を晒す事になる。

もう少しオブリークトに包むべきなのだろうが、どんなに言つ繕つて  
も厳然たる事実であり条理である。

ゆえに目を背けるよくなことはしてはならない。

二次元に置いてはそんな心配はいらなかつたものの、その世界に暮  
らすとなれば10年、20年と先があり、魔法的な何かが無ければ  
等しく老いたりばえ、おじいちゃん、おばあちゃんなど化す。

加齢臭もするだろうし、皺も増えていく。

背骨が曲がり、筋肉や脂肪がこぼれ落ち、歩けなくなるかもしけな  
い。

だが安心してくれ。

このおっぱいチートは微乳、ひんぬう、巨乳、爆乳、横乳における曲線美の調整や下乳において良く見えるようになり脂肪の配置や柔らかさを微妙に変えることによってうんぬん、あのキャラが巨乳であれば、ひんぬうであればという願望を叶えることもできる——「おっぱいを操る程度の能力」ではあるがその能力にはレベル2があり、そのレベル2はまさしく神の御業とも言つべき効果を發揮する。そう、名づけるとしたならばアンチエイジングEXである。

アンチエイジングとは意訳し、分かり易く簡潔に述べるならば老化防止のことと言つ。

とはいえて生きていれば老化していくのは自然、老化しないのは不自然である。

防止と言つよりは抑制といった方が正しいか。

そんなアンチエイジングの効果を極限まで高め、全く別物し、上記の正しく老化“防止”を実現させたおっぱいマッサージ。

それがレベル2の効果だ。

具体的なメカニズムを語るのは省略するが、とにかく凄いおっぱいマッサージで老化を防止し、どうにかしておっぱいの時を止め、しかしおっぱいはおっぱいという単体の生き物ではない——ゆえに体にもその時の留まりが影響し、すなわち寿命で死ぬことは無い不老と化す能力。

畏怖されるべき異能である。  
リアスキル

戦慄してくれても構わない。狂喜乱舞してくれても構わない。

どこの学園都市であるならば女性研究者によつて研究され尽くすである「この」の能力。

おっぱい——いや、胸を揉めば男にも効果を發揮する正しく等しく全てのおっぱい——男の場合は胸とする——チートをせるこの能力。

もしばれれば比喩ナシに眞面目に解剖されるに違いない。

と熱心に語りすぎたところで閑話休題。

彼は自室でアイシテルと話しながらもとある本を読んでいた。

### 『猿でも分かる乙女心』

そつ、彼は勘違いスキルを消し去るのと努力しているのである。  
涙ぐましい努力。

その姿に拍手をせざるを得ないが、したとこりでなんだといふのは明白。

とつあえず拍手は自重した。

「アイシテル・・・乙女心はかくも難しいんだな。」

『それを読んで分かった気になつてたら、また勘違いするよ。やつと。』

「・・・どうしてそういうことを言つんだ。頑張つてるんだから応援してくれれば良いのに。」

『だつて・・・せつかく間近で勘違い系主人公の滑稽な姿を楽しめるからと神様に志願したのに。結局良い子ちゃんっぽくなつてるんだもん。私つまらない。』

デバイスは志願制らしい。

「・・・俺を怒らせると酷いぞ?」

『じつするつていうのよ?勘違い坊や。』

『納豆』はんに混ぜ込んでやる。』

汚いと思うよ？

そして君は金属の塊を食べようと言つたのだろうか？

『ぶふつ！？な、なんていう鬼畜。げ、外道つ！！外道だわつ！？私の美しいボディが納豆菌で汚れるじゃない！？』

「嫌だつたらこれを教える。』

『ん・・・何々？

葛藤？これが何？』

「かつとづーーーって読むんだな。』

『・・・。』

デバイスがアホの子を見る目で見つめた。

目、無いんですけど。

「しょ、しょうがないだろつ！？

中学一年の時に死んだんだから、学があるわけじゃないんだよつ！

！』

そして彼は本を読み終わるとおもむろに胡坐をかき、手を股のあたりに置く。目を瞑つて身じろぎもしなくなる。

瞑想である。

ちゃんとしたオリ主であれば瞑想と聞けば「体内の魔力を感じ取る訓練か！」とティンと来るものだが、彼の場合は違う。

彼女達の将来が楽しみがゆえについついエロい視線を向けていた——もといこの色欲を抑制する訓練である。

まず彼は魔力がどうとかというよりもその人格の矯正から始めた。アホである。が、切実な問題でもある。

瞑想をし、できれば悟りを開くのが目的だが、ドウ考へてもそれは無理に違いない。

彼の思考回路を除いて見る。

おっぱい・・・無限のおっぱい・・・

いや、待て待て。

おっぱいは違う。おっぱいなんていらないんだ。

だがしかし、おっぱいというのは如何せん俺の心をつかんで離さない。

これほどまでに拒絶してもおっぱいが出てくるということはもしかり。

俺の心に巢食うおっぱいはただのおっぱいじやないんじやないだろ

うか？

きつとおっぱい型宇宙人などが俺の精神から侵略し、体をのつとつ、俺の体のいたるところをおっぱいに変えるに違いない。

それは嫌なようで嬉しいかもしない。

そもそもおっぱいチート自体、おっぱいを揉むための口実がてら貰つたようなものだし、自分の体がおっぱいとなりえるなら誰かのおっぱいを求めて徘徊せずに済む。が、自分の体のおっぱいで俺は満足できるのだろうか？

おっぱい神としてーーーいや、おっぱいの神を召喚るのはまだ早いか。

最低限おっぱいスカウターの技術を会得しなければーーー

といふかおっぱいを考えていたら肉まんが食べたくなつてきた。

あの白い肌にホカホカの具。正直肉まん神。チョコまんなるものもコンビニに売っていた気がする。

チョコまん。中々惹かれる。そういえば犬にチョコを与えるといけないとか聞くが一体どうしてだろうか？

ネギもそうだったな。あ、ネギはあれか。ユリ科の植物か。

ユリ科の植物には毒が含まれるとかなんとか。だからかな？たま

ねぎやネギは大丈夫なのだらうか？

今まで食つてたんだけど・・・いや、そもそもユリ科の植物だっけ？

非常にドウでもいい思考回路だった。

結果から言えば一年後ぐらいには彼はなんとか工口から脱する。

頑張ったね・・・うん。

「(ノ)飯よお。」

下の階から母親の文香が晩御飯に呼ぶ声が聞こえる。

「ひして彼の一曰は終わる。

フレシアテスタロッサ  
P.T.事件の始まりはすぐそこである。

## 巻き込まれ始めた

「なにこれ？」

歩いていたら何かに出くわした。

黒い形にネコ……いや、ぬこの目をした珍妙な生き物である。なんか触手が生えていた。

「……」生物もいるんだなあ。」

響はそんなことを呟く。

もちろんそんな生き物がはびこるような世界ではない。

「つまつ…？」

『ふりてくしょ～んつー。』

触手が響に襲い掛かるがそれを基本魔法のプロテクションで防ぐアイシテル。

響は少し焦る。

田の前の黒い塊は何かの生き物にジューエルシードが憑依した姿。寄生、共生？なんにせよ合体した姿だ。

合体したからといってなぜこんな形になるのかが意味不明であるが。

「」こんな気性の荒い生き物がこの街の近くに居たとは……知らんかった。」

『何言つてるの。これは生き物とこつより魔法生物なのよ。』

「ん？」

生物には変わらないんでしょ？」

『ただけどそういうじゃない……とこつかそれかいじやなことい

うか。ほら、キタつ！…』

「はつ？』

つてぎやあああああああつ！？』

さらに触手を増やして攻撃を続けてくる黒い塊。

アニメであるならばただ黒いだけだが、いまやこれは現実として田の前にある。

うじめく体はどうも肉質的で結構気持ち悪い上に、そこかしこから触手が生えてそれが突き刺そうと襲いくる。そして田玉は大きいのがそのまま実写化されたもので、正直下手なホラーよりもグロイ。当然のことく一般人気質の響は声を荒げた。

そして逃げた。

『ちよ、ちよつとつ！？

た、戦わないのつ！？』

「あれと！？バカじやないのつ！？

あんな意味不明な生き物と戦うとかバカかつ！？』

『誰がバカとつ！？

所詮私の玩具のクセに私をバカにするとは・・・ちよつと生意氣じ

やない？』

「誰が玩具かつ！？』

とか言い争いながら逃げる響。

そして触手に足をとられた。

「や、やばつ！？

え、これ？どうされるの？何されるの？

食べられちゃう？頭から丸齧りですかつ！？』

『ふふふ・・・ぞまあ。』

「ちょ、おまつ！…食われる前にアンタだけは壊すつ！…』

『そんなこと出来ないでしょ！。ほり、手まで巻きつかれて。』

「うつおおおおおおつー？

しまったああああつー！手が・・・手が引っ張られるつー？」

『そのまま丸齧られてね、響。』

「ちょ、えつー？マジで助けてくれないのつー？ていうか助けられるつー？」

『確かに助けられる。でも嫌。』

「えつー？だめもとで言つただけなのに・・・最近のパソコンパナイね。つていうか、助けられるんならハヨウ助けんかつー？」

『ええええええ・・・・・気分じゃない。』

「気分で人助けとかどんな鬼畜ですか。ホントまじ助けてください。」

『ていうか、わつも助けたから良くないかな？』

『いやそんなこと言つてる場合じやなーーやっぱつ？ほんとマジやばい、やっぱれる。お願い、ほんとお願い。お願いだから助けーーーぐおおおおおおつー？間近に牙が、牙が迫つてるつー？

てこうかこんな場所に口があつたのかつー！ヒトデみたいなやつ・・とか言つてる場合じやなくてだなつー！

も、もう・・・ほんと限界。』

閉じようとする口に手を当してなんとか閉じられないようにと頑張つていいのだが、如何せん態勢が悪い上に腕もふるふるしてきた。彼の精神年齢は二十台ちょっとであるが、肉体年齢はあくまでも十九歳なのだ。

それでも仮にも動物のアゴの力に耐えられてるのはさりげなくアイシテルによる肉体強化の魔法があるからである。しかし、口のままでは黒い塊の糞と化してしまひ。

「くわおおおおおおおおおつー！こんなはずじゃなかつたのについ  
いいいつー！」

悪役が死に間際に発するようなセリフを言つてブルブル震える腕が外れそうになる。

さすがにみかねたアイシテルが助けに入らうとするがそれよりも重大な案件が発生した。

もとい元祖主人公である高町なのはの登場である。

本来の歴史とは打つて変わつて、すでに変身済み。なおかつリンカー・コアを求めるこの黒い塊に襲われるのはユーノであり高町なのはであるはずだった。

そこへ通りかかったリンカー・コアを持つ生物。もとい響は丁度言い獲物であつたのだ。

その戦闘時の余波をかぎつけたユーノ・スクライアがなのはに助力を請い、レイジングハートを手に取りやつてきたというわけである。

「 もう、救援かっ！？」

人の気配に振り向いた瞬間、響は固まつた。

当然である。気まずさゆえにだ。

そこで響が起こした行動はもちろん。

「 や、やばい・・・よりやばいぞ・・・つていつまで噛み付こうとしてんのっ！－！

邪魔だあつ！－！」

目の前の黒い塊を触手に纏わりつかれながらも蹴つ飛ばし、その辺の庭の草むらに隠れることだった。火事場のなんとやら。ところがやつだ。

「戦略的撤退と言つやつだな。うん。」

『逃げてばかりじゃダメだと思つよ？』

「やかましい。これは俺のためではなく、彼女のためだ。夜の街を飛行してこるとこり、こきなりいつぞやの変態が現れてみる。むしろ俺を見て逃げかねんだろう？」

『・・・確かにそうかもしけないけど可哀想なくらいにみじめな気遣いね。』

「・・・うるさいやー。」

『どうか飛行することには突っ込まないの？』

「え？ ああ、そういうえば飛んでるけど・・・す」『テクノロジーだな。オマエといい、今の地球はやたらとか科学力が高いみたい。空も飛べるのかあ・・・アイシテル、俺も飛べないの？』

『飛べるけど・・・普通に受け流すのね。』

「死んだ時にこの世界は空を飛んで弾幕芸ショーティングゲームをする少女達がいると聞いていたからな。」

『しゅ、シユーティング・・・』

「あ、それより見てみろ、なんか倒したみたいだぞ。ていうか、今更だけどあの黒い塊つて何？それと氣のせいじゃなければフェレットらしき動物が喋つてる気がする。」

『とりあえず帰らないの？』

「そうだな・・・すつごに疲れたし、腕ぶるぶるしてるので早く寝よ。』

『んじゃ結界抜けるね。』

「なんか良く分からんが了解だ。どうせなら空を飛んで帰りたい。』

『はいはい、ええと空を飛ぶやり方は・・・』

こつして響はリリカルでマジカルな世界に片足を突っ込むのであった。

「「これ、 やんなくちやだめなの？」

『 また襲われるかもよ?』

さて、俺はといつと特訓することになった。

なぜかといつとアイシテルの話によるとまだこんな感じの出来事が起きたらしい。

じゅえるしーどとか言ひ厨一な名前のアイテムが街のあちらこちらに落ちたとかなんとか。その結果なんちゃらかんちやらとか。厨一過ぎて聞いていられなかつた。

よく分からなが、あんな生物に襲われるのは勘弁なので少なくとも逃げられるような魔法は使いたい。

「えーっと、 まずは何々?  
アイシテルセットアップと言いましょつ・・・とな?」

そのためにもアイシテルの取り扱い説明書を読んでいる。  
アイシテルが口で説明するのが面倒だから勝手に読めといわれて作られた冊子である。  
こんなことを言えと要求していくとは。  
アイシテルだつて厨一じやないか。

「アイシテル・・・せ、 せつとあ~つぶ。」

小声なのは仕方ないよね。  
恥ずかしいし。

すると胸のアイシテルがぱつと光り、 アイシテルから自信を守る強靭な衣服をイメージしろとかいわれた。  
強靭な衣服つてなんだよ。

綿100パーセントの服じゃ駄目と書つことだらうか？  
ポリエステル繊維を使えと？

『そういう意味じゃないつ！あほつ！』

もう一つのことと鎧でいいじゃんと考えたら服が脱げた。

・・・なぜ？

意味が分からない。

上着が溶ける様に消えていき、次にズボンが溶け消え、パンツが最後にはじけ飛ぶ。

確かに魔法少女的なアニメの变身シーンでは脱げるのがセオリーだが、男子子でも変わらないのだろうか？

そして体が西洋鎧に包まれる。

俗に言うフルプレートメイルで、肌の露出部分が無くなつた。  
そしてゴツイナイフが一本とすらりとした眺めのナイフが一本。  
両手に一本づつ出現した。

「ゴツイナイフとはいえ、西洋鎧姿には合わなくないか？」

『ならさらに剣もイメージして腰に差して置けば？』

「じゃあそうしよう。」

うむ、なんかそれっぽくなつた。

ただ身長が足らないのでなんか気持ち悪い。

『じゃあその姿のまま裏山にでも行つて見ましょくか。』

『裏山で練習？』

『そゆこと。』

てなわけでパツと移動して裏山。

取り扱い説明書にしたがつて順々に練習していく。

とりあえず一度使ってみることを目指にさあさまな魔法をやっていくと、重大なことに気づいた。

「・・・なんか攻撃系多いな。」

『そりそりでしょ、私はアームドバイスだし。』

テハノフたの間

アーチーの手元には、彼の父の名前が記された手帳がある。

「莫凝哉？」

いや、別に戦う必要は・・・」

『あまあまあまあまあまあああいっ！…』

おおや、

オマジナは俺が守つてやる!! 約束やつを守つてしまた

つ  
！  
？  
□

「……た、確かに、むしろ積極的に言いまくりたい！」

かりにこんじやないだろ？

『んじゃ今、出すから。』

何を？

「なはつ！？」

目の前に音を発して現れたのは銀髪オッドアイの——こいつやの

俺だった。

野郎が何見てんだ「ラ的な田線をくれていい。

「あ、あてつけか?」

『おつとど、間違えちゃった、テヘー。』

「・・・まあ良い。模擬戦といふことならば、こいつに斬りかかって問題ないんだよな?』

『まね、そう簡単にはいかないだらうナビ。』

「・・・ふふふふふ。よしきた。殺そう。こいつを殺して俺は過去から決別するんだ。』

すらりと腰から剣を抜く俺。

そしてそれを見て、銀髪オッドアイの――イタイやつも虚空から剣を出した。

「俺に挑もうとは・・・バカなやつだ。なのは、見ていてくれ。今俺がオマエに纏わり付く蛆虫を殺してやるからな。」

「殺せるもんなら・・・つておいいにいつー?」

『何?』

「いや、何じやないよつー?」

あれのセリフどうなつてるのつー? ていうか彼女、今ここにいないよねつー?』

『半年前の響を再現してみました!』

「せんでいいつー! ていうか、あれか。これを倒すまでこれを相手しないといけないの! ?』

『もちろんサア!』

「お、おまえ・・・ほんと鬼畜な。』

げんなりする。

とつとと斬り捨ててしまおう。

そうだ、それがいい。

「せこやつ！」

「ふつ・・・さすが非モテ君だ。剣筋がなっちゃいない。」

「いはつ！？」

オマエも非モテだろつーと思いつつ。

振った剣はかわされて、俺に向かつて俺が蹴りを繰り出してきた。しかし俺は負けじと態勢を立て直し、俺に向かつてもう一度しかける。

俺はその銀髪の髪を気障つたらしくかきあげ、俺に向かつて再度力 ウンターを放つ。

しりもちをつく俺。

そして愚者を見るかのように見下してくる俺が田の前に突っ立てる。

非常に腹が立つ。

ていうか、俺が相手だとややこしいなつー！？

とりあえず目の前のコイツは厨房と呼ばば。  
で、厨房は俺に向かつて

「僕としたことが・・・つい本気になってしまった。許してくれた  
まえ。」

殴つて良いだろうか？

というか殴れないんだった。こいつ俺のくせに強かつた。

魔法とか魔力とか使って思いつきり忌々しい過去<sup>1</sup>と吹き飛ばす  
もりで攻撃しても死んでくれない。

俺は日が暮れるまで厨房に斬りかかり魔法をうちまくったのである。



## フラグが立ちあがつて立たないんだ

困つたことに厨房に手も足も出なかつた響。

その晩、彼が枕を濡らしたのは言つまでも無い。

さらに一週間ほどが経ち、段々剣を振るのに慣れてきたかなーと思つてみると、なにやらひし形の宝石のようなものを拾つ。

そして響の田の前には金髪の美少女が。

フェイト・テスター。その人である。

「それを渡して。」

鎌状のものを向けられ、焦る響。

だが、響も慣れた物。

訓練でちょっと強くなつていた気がした響は調子に乗つていた。

「むむっ…なにやつ……」

瞬時にアイシテルをセットアップ。鎧を発現させずにナイフのみを手に持つた。

調子乗つていてはいえ中身が中身。もちろん戦う気など無く、単にビビりて武器を構えたというのが大きい。

少し逃げ腰になつてゐるのが哀愁を誘つ。

「・・・渡してくれないなら力づくで―――」

「は」「どうぞ――」

では、さよなら――」

「・・・あ、ありがと。」

カチャと武器を構えたフェイトにビビつた響は即ジュエルシードを

渡す。

響は小声でアイシテルと相談した。

「……ちょ、この子この歳で武器持つて脅し取るとか！？」

『きつとろくな教育をされなかつたのね。かわいそうに。』

「それ以前に表情を全く変えないあの余裕……強者とみた。」

『ええ、響よりも大分魔力が高いね。振る舞いもデバイスを振るうことに対する慣れがある。』

「魔力つて……デバイスを動かすのに必要な力だつたよな？」

『そうよ。』

「では彼女の持つているものもデバイスだつたりする？」

『そうね。』

「また武器か。……もしかしてデバイスつてパソコンの進化型とかじゃないの？」

『今更すぎてデバイスの私は涙目。』

「き、気づかんかった。」

『・・・』

「まあまた、ほら。一度死んでるからさ。死んでた間にそんな感じの物が出てきたのかなあとか思つてたわけで。」

『・・・それにしても気づくと思つけど。他の人は持つてなかつたじゃないの。』

「いや、高級品なのかなあつて。」

『・・・』

「まあいいじゃないか！ほら、結局のところアレでしょ？

アレアレ。あの・・・あれだよ。デバイスつてのは魔力とやらを持つものが使える護身用の武器とか・・・そんな感じでしょ？それを脅しに使うとは・・・許せん。彼女のためにも説教してくる。あのままでは将来的に犯罪者の仲間入りしかねない。』

『・・・止めはしないけど。』

響はこうしてアホな行いへと走るのである。

ちなみに彼女はすでに犯罪者の仲間、といつか娘である。

「ちゅうとやーの君。」

「・・・何か用?私は忙しい。」

ちゅうとイラッとしてる氣がある。

反射的に謝りやうになつたけれどもこれを我慢する。

「こ、忙しいことに申し訳ないんだけどイキナリ武器を構えて脅し取るのはどうかと思うんだよ、お兄さんは。うん。」

「貴方から構えたのに?」

「え?」

ちゅうとつけ?

「ちゅうだよ。私から構えたわけじゃないし、望んで貴方に危害を加えようとしたわけでもない。」

「ちゅうだったか・・・あ、えと・・・だからといって・・・

「・・・話すことは何も無い。それじゃ。」

「あ、はい。」

そのまま去つていくフェイトを見送る響だった。

「俺、間違つてたか?普通に考えてあんな怪しいコスプレして鎌つぼいのを持つてゐやつが居たら警戒してしかるべきだよね?」

『・・・とりあえづ帰ろつか。』

「・・・うん。どうでもこによな。正直言つとお近づきになりたい

とか思つていたのだが。「

次の日。

響は図書館にいた。

猿でもわかる乙女心を返しに来たのだ。

「次はどんな本を借りるべきか・・・乙女大図鑑・・・乙女はいつもして男を選ぶ百選・・・女の子は複雑なのだ・・・女子の憂鬱・・・女の子の気持ち・・・全部借りるにも小学生は一冊のみだし。」

返し忘れなどを防止するために図書館では年齢に応じて借りられる冊数の上限が決まっている。

小学生は一冊までだ。

「うひ、あ、すいません。」

「うひうひうひません。」

本棚を見ながら横歩きをしてると人どぶつかる響。

響の視界にまず入ったのは紫色の髪の毛。

紫とか人類的にありえないなあとか自分のことは棚に上げて少し驚く響。

今では黒髪黒目としているのだが。

「・・・とこりか紫とか懐かーーーおおおつーーー。」

「あの、どうかしましたか?」

瞬時に顔を逸らした響。

月村すずか。彼女はうひうひとの図書館こやつてへる常連さんである。

響は響で毎度の「ごとく焦る。

最近焦つてばかりだと内心思いながらも響は気づかれないようになると声を若干高くして、なおかつ顔は俯いて顔のつくりを分からないようにした。

どおりでどいかで見たことがあるわけである。

「いえ、別にどうもしないです。んじゃ、俺はこれで……」「ん？あ、でも本は良いんですか？」

「あ、いえ、見つからないみたいなので……出直そうかなあと」「職員さんに聞けば良いと思いますよ？」

「いえ、その……あの……人見知りなので……それでは。」

その場から離れるためのひとさの嘘であるが、俯いてることと言ひ拳動不審気味なところと言ひ、すすかは納得し、それならば。と手を合わせて提案する。

「……うーん。なら私が変わりに聞いてあげましょうか？」

「エ、いや、あれですか。そんなことしてもうつのも……」「別に気にしなくて良いですよ。ついでに私の探してる本も聞くつもりですし、気にしないで下さい。」

「……すっごいエエ子や……」

「え？」

「あ、なんでもないです。……まあやけめで言つならお願ひします。」

重ねて言うが彼は悪人と言つよりは善人よりである。

そんな彼が他人の親切をつつけんどんに跳ね除けることは出来ず。しかも見ず知らずの人親切をするという今時の若者には珍しい心優しさに感涙し、自分の昔と彼女とを比べながらその酷さに嗚咽しけつとも、響はなんとか彼女の親切を受けることにする。

実際困っていたのは本当で、同書せんじ聞くことと思つていたといふ  
でもあるため聞くことに関してはなんら問題は無い。

「あの、すいません。」

「はい、なんですか?」

「えーっと私は動物の——特にネコに関する本を読みたいのですか——

すが——

いや、問題はあつた。

響は気づいたのである。

俺の借りる本の内容はちょっとと聞かれたくない。ヒ。

別に職員さんならば構わない。

わざわざ職員にまで気遣つてたら図書館で本など借りられない。知  
られたく無いところもあるあるがそこはやむをえない」と  
だ。

借りる際にどうのみちを見せなくてはいけないのだからして。

だが、彼女に關しては別である。

普通に氣まずい。

とっても氣まずい。

一応同年代の女の子 ではあるものの中身的には妹とか娘とか  
そんな感じの歳の子。

この歳 といつても9歳だが——で子供に自分の情けないと  
こうを曝け出すよつて非常に恥ずかしい。仮に同年代でも恥ずかし  
いけれど。

確かに響の昔はアレであった。

アレ過ぎていたが今は少なくとも改心し、直していくべく頑張つて  
いる最中なのだ。

今の自分にそのような羞恥プレイはレベルが高すぎるので。  
田の前の少女が少年であればまだマシだったものを。

ゆえに彼は致命的の一手を取つてしまつ。

「それで、貴方は何を借りにきたの？」

「え、お、俺は・・・えと・・・アレだよ、あれ・・・えーっとネ、ネコの本かな?」「うんーー!」

ここだけで見れば見事な回避とも思つが、チョイスがダメだつた。

「へえ、貴方ネコを飼つてるの?」

「え、い、いや、ネコを飼いたいとは思つてるんだけどね?あ、でもそつそつ氣軽に飼おうと思つてるんじやないよ?」

ほら、動物は生き物だから可愛いだけじゃなくて飼う上での辛いことや氣をつけなくてはいけないことが多々あるだろ?し・・・だ、だからかな?まずは本を見てネコのことを良く知らなくちゃつて思つて・・・」

ネコを飼いたいと言われ、下手に嘘を付くとばれると思つたか響はまだ飼つていらない事についてネコについて詳しく知らなくとも問題ないようになに嘘をついた。

ひとつもの嘘にしては理由がしつかりしていて内心ほくそえみ、完全に誤魔化せた!と思ったのもつかの間。

「・・・す」「いなあ、その歳でそこまで考えてるなんて。

私も始めてネコを飼う時にお父様にそれを言われたの。立派だなあ。

」

「君も同じ歳でしょ?」

「え?あ、うん。だからこそ余計に凄いんだよ。」

といつて微笑む月村すずか。

その笑顔につい赤面する。」とは無かったが本当に良い子だなあと  
ちょっと泣きそうになる響である。

もちろん昔の自分の酷さがあるゆえにそれと比べて自分が一体どれ  
ほどアホだったのか。

情けなさ過ぎて悲しくなったのだ。

そしてこの嘘が響の首を絞める」ととなる。

職員さんに案内されつつ、途中で話しつづける2人。

「ねえ、貴方のお名前は?」

「え?あ、俺は・・・相馬ひ――」

「相馬?」

「あ、いや、そ、そそ、相馬ひかりだよ。」

危なかつたと小声で呟く響。

『それにしても氣づかれないものね。意外と。  
「・・・多分それだけあの髪と目の色が印象深かつたって事でしょ。  
・・あまりの性格の違いに同一人物だと思われてないってのもある  
だろうじ。』

念話で会話をする響とアイシテル。

余談であるが先ほどの嘘はアイシテルが念話で響に指示したもので  
ある。

もちろんアイシテルは今回の嘘の悪いところを理解して教えてこの  
指示をしている。

アイシテルはお茶目なのだ。

## お茶会に誘われて

「ねえ、ひかり。Jのネコはまだつ?」

「J、これはまた可愛い・・・なんだこの可愛い。」

あれから一ヶ月ほどが経過した。

現在2人で仲良く読書中。

なぜこうなったかは特に語ることも無い。

共通の趣味。

それは友達作りや合コンでのきっかけとしてはあまりにもポピュラーでセオリーで常套手段である。

そう、ネコ。

ネコの話題に響が——正確にはアイシテルが響に乗らせるよう誘導してしまったのが運の尽き。いや、今はまだ美少女だが将来的に確實に美人となる女性と接点をもてたのだから男としては喜ぶべきである。

事実、響は喜んでいる。が。

それと同時に悲しんでもいる。

彼女に会いたくなかったのは言つまでも無く高町なのはと彼女が親友であるから。

親友を傷つけた人間に友好的に接するような人間はいないだろ? ゆえに彼女と友達になつたところで本名を明かしてしまえばそれだけの関係なのだ。

どの道彼女にフラグ立てて、イチャラブすることは叶わない。

そのことに嘆き苦しんでいた。

不幸中の幸いといえばネコの本が意外と面白いということである。

気づいたら普通にネ「好きとなつていた。

「あ、そういえばね？」

「ん? 何。」

「今週末にお茶会があるの。ひかりも来る?」

「・・・・つづむ。」

「何か用事があるかな?」

「いや・・・・その。別に暇はあるナビ。」

響が渋り理由は言わずもがな。

彼女のお茶会に誰が来るかと言つこと。

2人きりでお茶会をするなんてことはまずないだろ。

それならお茶会といつよつも普通に食事である。

「他に誰か来る? ていうか来るよね。確実に。」

「ええと・・・アリサちゃんとなのはちゃんと特に仲の良い男の子も来るの。お兄ちゃん。あとはなのはちゃんと大丈夫だよ? きっとすぐに仲良くなれるから。」

「いや・・・遠慮しておくれ。せっかくだけども・・・」

「どうして?」

「いや、だから人見知りだと何回言えば・・・」

「うして誘われるのは何度もか。」

響はこれ一度きりではなく何度も誘われていた。

その都度断ってきたのだ。人見知りという理由で。

もちろん響とて行きたいことは行きたい。

別に人見知りではないのだし、美少女達と、将来のおっぱーーーげふんげふん。と近づける良い機会である。

下心を無しにしてもこんな良い子達と友達になれるのは光榮だ。

だがしかし。

もしバレたら?と考へると如何せん足が動かない。  
ばれないとは思つもの、ばれた際のリアクションを考へると非常

に気まずいのだ。

すずかだけにバレルのはともかくとしてもなのはにアリサまでいる  
となるとせつかくのお茶会が台無しになつてしまひ。  
そんなことになつてしまひと響のみならず、彼女達も氣まずくなる  
だろうし、十中八九お茶会どころではなく。  
ばれたときの状況を考えると非常に気が進まないのだ。

とこつわけで。

「『めんね。悪いけど』の話は無かつた」と・・・

「・・・どうして?」

「え?」

「毎回思うんだけど、ひかりって私の事嫌い?」

「いや、別に。」

「その割にはどこか壁を作つてる気がする。」

「そ・・・そうかな?」

「お茶会、そんなに行きたくない?人見知りだつて早めに直してお  
かないとこれから先、苦労するよ?」

「え・・・つと、うん、それは分かつてるんだけど・・・」

「怖いのは分かる・・・なんてことは言わない。私は人見知りつて  
わけじゃないし、気持ちが十全に分かるなんんて口が裂けてもいえ  
ない。でも、頑張つて直そうとしない限り何時までもそのままなん  
だよ?」

「そ、そうだね。」

「じゃあ頑張るつよ。皆良い人達だからきっと助けてくれるし、ひ  
かりの力になれると思うな。きっと今が良い機会。やるべき時だと  
思う。」

「・・・えつと・・・その・・・」

「ね?」

「あ、うん、じゃあひょつだけ・・・お邪魔してもいい?」

「もひろん。」

「ひじて響の出席が決まったのである。

帰り道。

「・・・憂鬱だ。」

『押し切られちやつたねえ。結局。』

「・・・ああ。」

『真摯に相手を思いやる相手に弱いね、響は。』

「・・・ああ。」

『・・・大変だね。』

「・・・笑えるのを堪えてるんだら・・・分かつてる。その震えた声で話しかけるのをやめる。打ち殺すよ?」

『あれえ? そんなことを言つてもいいのかな?』

「あ、?」

『厨房を強化しちゃひづ。よつやく先が見えてきたところなのに、ここで強化しちゃつとあと一年はあれと顔を突き合せないといけなくなつちゃうよ?』

『すいませんでした。だからそれだけは勘弁してください。』

『よひしこ。』

泣く泣く謝る。

「なあ・・・ほんとひづよつ。バレルと思つんだ。意外と。」

『ひじて?』

「なのは・・・と俺が呼ぶのは馴れ馴れしすぎると。高町さんは被

害者だ。おやじく他の人間よりも俺の顔を強く覚えてる……と思つ。

「まあ確かにね。』

『誤魔化せるか結構な不安がある。いつそのこと風邪とか急用で休むのはどうだろ？』

『あそこまで言つたのに、状況からして嘘だとばれるんじゃないかな。下手したらお見舞いなんてこともあるかも。』

『さ、さすがにそこまでは……』

『彼女達はやたらとお人よしだしねえ。ありえないと断じるのは難しいんじゃない？もしくはすずかちゃんがお見舞いに行くねつて話になつてそこから皆で行く！なんて流れにもなるかも。』

『・・・そうなると文母さんを田撃されるな。』

『ばれるでしょうね。』

学校に親が呼ばれた時に、すずかやアリサが見てないとも言い切れない。

『いつそのこと女つてことにして女装したら？

まずはばれないと思うよ？』

『・・・それはちょっと遠慮したいな。そもそもばれるだろう。』

『大丈夫じゃない？

ほら、響つて綺麗系のイケメンだし、女に見えなくも無いよ？多分。

』

『仮に女装したとしてもいきなり女装して行つたらなんじゃそらー！？って話になるだろうが。』

『女の子でしたつてことにしたら？』

『これ以上嘘で塗り固めたらまた何かややこしい状況になつたから遠慮しておくれ。』

『んもうつーあれもいやーこれもいやじゃ話が進まないでしょ？！』

「・・・もつとまともな案をくれ。」

『ばれたらばれたでいいんじゃないの？その時はその時だよ。』

「・・・。」

『それにてのまま嘘を付いてたといひでいつかどこでバレるの明白。』

それともずーっと嘘をついたまま友人関係を育もうって言ひの？』

『うぐつ・・・それを言われると・・・』

『ばれた時はばれた時に考えれば良いよ！

さあいこいつ！…』

「・・・面白がってるでしょ？」

『今更なにを。』

「・・・俺、アイシテルのこと嫌い。』

『安心して。私も響の事、好きといひ詫びじゃないから。』

「・・・そつか。』

なんか傷ついた響である。

結局『我に妙案ありひー』とこうアイシテルに任せた考へることを放棄した響であった。

## 泣いて逃げた

「・・・憂鬱だ。」

響はといつと憂鬱真っ盛りである。

なんせ今回はお茶会！

そう、きやつらが来るお茶会なのである。  
下手なバイトの面接や会社の企業説明会なんでものよりも緊張する  
であろうイベント。

すっぽかせたらと何度も思つたことか。

「本当に大丈夫なんだろうな？」

『大丈夫、大丈夫。私にまかせなさいーー。』

「アンタだから不安なんだが・・・」

えっへんと胸を張るアイシテル。  
胸は無いんだけれども。

実に不安だ。

「ばれたらホント頼むよ。」

『だから分かつてるってば。まったく女々しいな。』

ほつておけ。

そんな感じのことと言いたそつに顔を顰める響だった。

どうやら俺が一番乗りのようで月村さんと2人きりでお茶を飲む。うむ。平和だ。

平和すぎてつい猫なで声で月村家のぬー」をナーテナーテするのも仕がない。

なぜなら平和だからだ。

平和ゆえに腑抜けたのであって、日ノろはこんなバカな真似はしない。

それがこの俺。相馬 ひびーーーひかりである。

近くには月村さん付きのメイドとか言うファリンさんとやらが一緒になって話をしているのだが、従者がそんなことでいいのだろうか?

さうに言えば、どうやらデジツ娘に分類されるようで、ここに来て早々服を汚され、脱がされ、入らされ（風呂に）、着せられた。

都合よく男物の服があるわけもなく。

なぜか月村さんのパジャマを着ているところの状況。

結局女装することになってしまった。

いや、女装というほどでもないか。

パジャマなのでスカートというわけでもなく、デフォルメされたネコがプリントされているだけのもの。

外見年齢も相まって女装している感は無い。

知らなければ女の子に見えるのは確かだが、子供の時は男の子も女の子も大して変わらないし、女物の服を子供に着せる親はちらほらいる。今の姿はその程度である。

何が言いたいかといふと、別に女装じゃないんだからねつ……と言つておきたいのだ。

自分のパジャマを見られることになつて少し恥ずかしがっていた月村さんが可愛かったとは言つて置く。

ちなみにもう1人のメイド長のノエルさんとやらは至つて普通のメイドさんだった。

きっとファリンさんは月村さんのお友達として——の意味合ひが  
強いて違いない。

でなければ常識的に考えて、召使の類が主のお客と席を並べてお茶  
を飲むなんてこと許されるはずがないからだ。

そして尋ねたい。

なぜにこんなにもネコが多いのかと。

まあ撫でてる分にはなんら問題はないのだが、如何せん、ぬこが可  
愛すぎてノックダウンされそうだ。  
ネコの多い理由でも考えて氣を紛らわせないことでもしないかぎり、  
俺はきっと鼻血を出して氣絶するだらう。  
なんてことはなく。

普通に気になった。

「それはね、保健所のとか・・・野良猫なんか引き取つてゐる  
に・・・」

これまた恥ずかしそうにうつむいたのは月村さん。  
本当にエエ子や。

もちろんあるがこうした人は少なからず居る。  
偽善と呼ぶ人もいるだらうが今回のコレは偽善ではなく完全な善と  
言つてもいいんぢゃ無いだらうか?

見れば分かることであるが、この家のネコはある種、異状だ。  
本来、ネコは群れる事を嫌う。

漫画やアニメなどで集会のよつて集まるシーンはあつても現実には  
滅多に無い。

犬のように仲良く一つの餌皿で餌を食べるなんて行為もしないのだ。

本を読んで学んだ知識なんだが、この家のネコは非常に珍しい。

よっぽどしつけが良いのか、はたまたそうした協調性を持つてでもここにいたいと思わせるのか。

次に注目すべきは毛並みや健康状態である。

もちろん世の中には野良犬、野良猫や保健所で殺処分される捨てられた犬猫を保護し育てる保護団体や個人の人々がいる。

保護団体はともかく個人の場合は独りよがりな善意であることが多い。

単純な話。

資金がないのだ。

一般家庭の人がネコや犬を複数飼うとなるとその餌代や予防注射代（国で義務とされる狂犬病など。酷い場合予防注射が一切されず、人間に危険が発生する）だけでも、かなり高額の世話代がかかる。糞尿の処理だつてかなりの手間暇がかかるはずだ。

時には群れに馴染めなかつた個体が虐めて酷い怪我を負うこともあるし、糞を処理しきれずに病気となり死んでしまう場合もある。

そういう人の多くは善意だけ押し付けて、結果的に苦しい生活を近隣住民や救うべき犬猫に強いることとなるわけで。いわばありがた迷惑だ。

口先だけでろくに救えてない、満足に救えてないという状況になる。悪いというわけでもないが誉められた行動でもない。つて、俺みたいなやつが何を偉そうに言つてるんだろうね。

とにかく、ここにネコにはきっちりと管理が行き届いてることが分かるのだ。

糞も見た限りでは見当たらない。

糞はそのままでは肥料とはならず、有毒なアンモニアが発生し、それが草を枯らす。

土中の自浄作用以下の量ならばともかくこれだけいれば確實に分解されない糞が出てくるはず。

しかし、枯れた草が見られないことから田に当たる場所だけ掃除しているということもなさそう。

おそらく専門の世話係を雇いつつも、屋敷に住む人間が一丸となつて世話をしているに違いない。

金持ちだからだろ！と言つヤツもいるだろうが、逆を言えば金持ちでもない限り下手な救いは中途半端になるだけでやめるべきということ。

そんな惨状を招くくらいなら政治家を目指して、犬猫の投棄を厳しく取り締まる法律を作るべく動いた方がよほど建設的で効率的だろう。

全部本の知識の受け売りだが、本当に彼女はネコを好きなようだ。ただ可愛いだけと侮ることなく、世話に関する手間暇苦労も含めて猫を愛す。

可愛い部分だけを見て、軽い気持ちで飼つてしまふと飼育者にとても飼われる側にとつても非常に不幸になる。

時には保健所に預ける際、「家のネコだけはちゃんと飼い主を見つけてあげよね！」などという身勝手なことを言つて捨てていく人間もいるらしい。

そんな人間が居る中で、彼女は本当のぬーリストと言つていいだろう。

「ど、どうかした？」

「「ううん、なんでもないよ。月村さんは本当に偉いなって。  
「えっと・・・そんなことないよ?」

本当に――自分の黒歴史が惨めに思えてきます。

どうしてあんなバカだつたんだろうね。

泣けてくる。

泣きそうになりながらも、「じゃん」を嫌で回していくヒップンボーンとインターホンの音が鳴り響いた。

いよいよ来たか。

「」「まで來たら覚悟を決めよう。

「「んにちはー。」

「「んにちは。」

まずは高町さんと――なんだこのイケメン。イケメンか?「うん、イケメンだ。あえてもう一度言おう。なんだこのイケメン?イケメンかつ声までイケメン。もといイケメンボイスなんだが。イケメンすきるだらう。

「「んにちは、すずか、來たわよー。」

次にアリサ・バーニングス。

高町さんの一件でぶん殴られて以来、とっさに逃げたくなつた。までまで、大丈夫ばれないばれない。ばれないばれない。

高町さんがこちらを見てくる。

そら、見覚えの無い人間がいたら気になるよね。

「」とにかく、皆。

・・・ほら。ひかり。言つたでしょ。」

「・・・あ、うん。」

「人見知りを直すためにも自分で自己紹介して。」

「わかつてると、月村さん。」

何度も重ねて言うけど、別に人見知りじゃないんだけどね。君たち以外の人間ならば。

立ち上がって、口を開ける。

「わ、私は相馬 ひかりっていいます。よろしくおねがいします。」

無駄にかしこまつて一人称まで変わってしまった。

月村さんは少し噴出していた。

行儀悪いよ？

「そうま・・・？」

高町さんがなにやら少し嫌そうな顔をした。  
ばれたかっ！？

「・・・アンタにお兄さんとかいる？」

何か言いたそうにした高町さんよりもバーングスさんがこちらに問い合わせてきた。

まあ聞かれますよね。

名字同じだもの。

小さい声だけど、「・・・似てるわね。ていうか・・・瓜二つ・・・

双子かしら?」とが言つてゐる。  
もちろんのこと。

「こませんよ?」

満面の笑みで應えてやつたぜ!-

ちなみに高町さんのお兄さんがこちらをじりと見ている。

その視線はどこか厳しい。

おい、9歳児に向ける眼光じゃねえだろ。

普通の9歳児だったらいこの時点で泣いてるわ。

といふが、まさか気づこいる? なんてことは……いや、までまで

大丈夫大丈夫。

まだ疑つてる段階だらう。多分。

背筋が脂汗でびっちょりになつてきたくらいの沈黙が終わつたあと。

「そうよね……あれみたいなバカがこんな素直なわけないし。  
「……そうみたい。よかつた。」

バーニングスさんと高町さんがほつと一息つく。  
そこまで警戒されるほどだつたんですね。  
俺、泣きそう。だつて男の子だもん!

「……身振り手振りからすると……いや、だが……雰囲気が  
あまりにも……つづむ……しかし重心の置き方といい……」

お兄さんはまだ疑つてゐるようである。

ていうか、身振り手振りつてなんじゃそれ?  
え、この人どんだけ?

この人と面と向かい合つたのは一度のみ。高町さんの家に謝りに行

く時だけ・・・だつたはず。

ていうか重心の位置とか見て取れるんですね。

何、この人。怖い。格闘技とかやつてるんですか？

いや、それ以前に格闘技やってても重心の位置で人の判別を取るうとする変態はいないと思います。

ていうか、こいつは俺とはまた別のベクトルで変態では?と思え始めた。

ちょっととした振る舞いでバレかねん雰囲気がある。

只者じゃないつーと思ったね、ぼかあ。

さらりと問題が積み重なった。

「あ、いらっしゃい。ちー君。」

ちー君とか親しげに相性で呼ばれた男はこいつがやの山田君（仮称）。美少女に相性で呼ばれるとは羨ましい。  
というか下手したら既にフラグを作っているのではないだろうか?  
妬ましい。死ねばいいのに。  
とこうか殺してしまおうか?

「・・・どう思つ、アイシテル?」

『バカ言つてないで、氣をつけないとーーほら、彼は転生者だから・・・』

「・・・原作にいない・・・その顔・・・おまえつー?」

性懲りも無くまた来たのかつー?』

「や、やべつー?」

これは非常にまずいつー!..

「えっと・・・なんのことだか？」

「ああつ！？」

馬鹿やううつ……てめえは居ないはずの人間だうがつ……なんでここにいるつ……

またなのはにセクハラする気かよつ！？この厨二野郎がつ……変装までしゃがつて・・・俺は騙されねーからなつ！！」

「ち、ちが・・・」

やばばばばばばつ！？

やばす！？

これは不味いつ！？

正義感溢れる山田君にしては端から敵対心MAXモードであるが、それが正しい。

あれだけ迷惑かけて彼の友達にセクハラしたのだから、むしろこれが正しいが当然だろう。

何も聞かず追い出されても文句は言えないくらいの酷いことだったわけなのだし。

お兄さんは山田君ほど敵対視しては居ないようだが（それはそうだ。仮にも子供なのだから）、いつでも高町さんの間に入れるようにさりげなく間に入っていた。

そのさりげなさがなぜか異様にぐさつと来ました。

周りの視線はまさかっ！？って感じである。

月村さんに至つてはその顔に凄まじいまでのガッカリ感 といえば若干コメディ臭いが、10年来の恋人に突如「別れよ。実は俺・・・女だつたんだ。」と言われた様な顔をしていた。

いや、そんな顔見たこと無いからこの例えが正しいのかは分からぬが何はともあれ、こんな時こそ困った時のアイシテル頼み。

さあ、存分に思いつきりやつちやつて下さいよ！？

アイシテルの姉御つ！？

『合点承知つ！』

そしてアイシテルがやつたことと言えば。

「ハアーハアツハアツハアツ！」

そいつは俺の偽者だつ！本物はこの俺！！

ビユーティフルひびーーー

「死ねえエエエエエエエエエエエエ！」昔の俺はいらんわあつーーー

いきなり月村家に突如出現した謎の厨房。

その正体は俺の昔のアレだった。

よつて俺はつい反射的にぶん殴つた。それこそ殺す勢いで。あらん限りの力をこめて。

「！」ふつ！？

・・・強くなつたじやねえか・・・ひびき・・・ガク。」

そのままズンと倒れこむ厨房。

なぜこれを出すつ！？

多分、同じ人間が2人もいるはずもないということを考えたことだろうが。タイミングと出現場所が意味不明すぎた。

なぜ月村さんのスカートの中からニコつと出てくる。

ほら、月村さんなんか倒れこんで・・・倒れこんで氣絶して・・・

ああ。

うん。これダメだ。

何より倒れ間際の厨房の言葉。

なぜ俺の名を言つてしまつたのか。

『響も“昔の俺”とか言ひはじつてゐるやつ。』

そうだったな・・・終わった。

何もかも終わった。

が、どこかすがすがしいのはなぜだらう。

そつ、きつとこれは。

友達を騙すことにして田を感じていた良心の痛みが無くなつたからだ。

それと同時に唯一の友達も無くなつてしまつたがな。

「・・・アイシテルのあまおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおお  
おおおおおおおお  
おおおおおお  
おおおおお  
おおおお  
おおお  
おお  
お

俺は泣きながら円村家を後にした。

「！？」

アイシテルには頼らないことを決めた記念すべき日である。

響はと畜'つとがむしゃりに走り逃げた。

結果。

いまだ月村家の庭に居た。

「どうちが出口? こうか向の森林?」

なんせ月村家は広い。

広すぎるくらいに広い。

森が広がっているのだ。

正直何のためにと思わせるほどに敷地が広い。

さすがにもう一度戻つて帰り道を聞くところとも出来ず。のんびり歩いて出口を探す始末。

空を飛ぼうと考えては見たものの、田撃われる可能性を考慮すると最後の手段としたほうが無難だろ。

「そつこえはあの厨房はどうした?」

『消したよ?』

「そう、良かった。あれがそのまま残つてたら、また下手なこと言うだらう? こ・・・は?」

響とアイシテルが話していると前方にありえないくらい大きなにやんこが出現した。

にやーんと若干のHマーがかかりつつもにやんじゅのんびり林を探索しているようだ。

「・・・月村さんは本当に凄いな。あんなネコまで飼つてるのか。

餌代とか糞の処理とかが大変そつだ。』

『・・・違うよ、あればジユエルシードを取り込んだネコつてところでしょう。』

「またそれが。じゅえるしービトやらか。まったくビリヒでも落ちてるもんなんだな。ていうかさ、あれここにいるの高町さんじやない?」

『わうだね。どうする?助けるの?』

大きなにゃんこの前には高町さんがいつの間にか来ていた。  
助けるとアイシテルに聞かれて、響は唸る。

「いや・・・別にいらぬでしょ。彼女は天才?らしいじゃん。  
俺が会ったあれよりも危険は少ないみたいだし、そもそも俺が何を  
どうして手助けをしようと?」

『変わりに封印をしてあげるとかどうだら?』  
それでジユエルシードを持つて、それをプレゼント代わりに渡せば  
あの時のお詫びになるんじゃないかな?』

「・・・なるほど、その発想は無かつた。それならそつと、俺もじ  
ゅえむしービトやらを探してれば良かつたんじやないつ!??それで  
仲直り・・・は無理でも、少なくとももう完全に気にしない、とい  
うレベルにはなつて欲しい・・・とこう願望を語つてみたが。どう  
なんだろうか?』

『試す価値はあると思つよ?』

「・・・本当だらうな?』

『えーっと・・・ですが泣くとは思わなくてね?その・・・反省  
します。』

アイシテルが語つてるのは田村家の出来事だらう。

『なのはちゃん経緯で、田村さんの印象も回復できるかもよ?』

「よし、なりばやりひーーー。」

『ヤヒで即答なのね。』

当然である。

響にとつての今生の友達。それが月村すずかなのだから。そして比較的寂しがりやの響としては望むところである。

わらじやる『』をアップさせているのは相手が強そうでないところもある。

「・・・だけど登場はどうすればいい?」

『え?』

高町さんは響に対して少なくとも好感情は抱いて無いだろ?。いきなり出たところで無駄な警戒を持たせるだけという可能性もある。

下手をすれば攻撃されかねない。

そもそもこのまま置いておいてもなんら問題はないだろ?。原作を知らない響とて、彼女が主人公らしきことは分かつていて。主人公ならば手に入れて当然。さらにことなりにはなんらかのチートを持つていると思われる山田君もいるのだ。まず間違いなく、手に入れることが出来るだろ?。

『なのはちゃんは優しいから・・・多分大丈夫じゃないかなあ・・・それともこにはなのはちゃんに任せて、他のジュエルシードを探す?』

「よし、やつしよひーーー。」

『これまた即答ね・・・ん?』

そんな感じのことを考えていると、またもや新たな人間がやってき

たようである。

いつぞやの「スプレ金髪少女。

フロイト。

「・・・こまだ鎌を持つてゐるんだな。」

『どうする?』

「どうもせんつてば。とにかく俺達は別のジユホールシードを探すま  
――なつ!?

フェイトはネコに攻撃を加え始めた。  
それを見てなのはも少女の存在に気がつく。

「なつ!? こやん!」に攻撃だとつ!?

許せんッ!—今度こそヤツを説教してくれるッ!—!

『・・・やめといた方が・・・』

「こや。だめだつ!—あのな!せ、じゅえるしーどとひうの被害者  
だひつ!?

無駄に痛い田てあわせる必要は無いつ!—!』

と響が話している間にも攻撃されるね!』。

その際、なのはなのはで変身中。

どうのこの言つ前にさつと行動を起しつづべきだ。

「いかんつ!?

こひしてゐ間にもあのな!がつ!—!

アイシテル行くぞつ!—!

せ、せせ・・・せつとあつ!ふ。

『相変らず小声ね。』

響の体が光り、月村さんのパジャマが解けるように消え、西洋鏡の

よつな甲冑が身を包む。

腰には飾りの少ない両刃のロングソードがささり、フルフェイスの兜が顔を覆い、伸びた髪が若干兜の後ろからほみ出す。

籠手のそれに一対のナイフが収納される。

変身完了である。

「セレの鎌の少女、ぬこを攻撃するとせびりこひだつーー。」

響が躍り出る。

「・・・誰？

貴方もジユエルシードを集めてるの？」

「集めてない。いや・・・せつを集めることとしたけど今回の用件はそれでなくてだな。」「

「・・・あいつつ！？」

おこ、響だつーおまえつーー。」「

「つー？」

なのははようやく変身が終わつたよう。

そして後から来たのだろう、山田君。

山田君は西洋鎧に包まれてこるものも関わらずに響の正体を看破する。

おそらく感知系の魔法を使つていて、そつこつたチートを貰つているのだろう。

デバイスを持つてないことから、肉体的なチートや特殊能力的なチートを貰つたのだと思われる。

「・・・」などとついで叫んでいたとは・・・オマエ・・・まさかつ

「！？」

「・・・。」「

響はどうするか迷っていた。

勝手に山田君が叫んでいるだけならば今は誤魔化せるんじゃないかなあととか思いつつ。

なのはが怪訝な顔を浮かべているがそれよりも大事なのはこちりである。

響はフェイトに向き直す。

「どうしてネコを攻撃するんだ？」

可哀想だろう。君の腕ならばそのまま封印するのも可能なはずだ。必要なく痛めつけるのは感心しない。」

「・・・こうした方が手っ取り早い。」

『確かにね。弱らせてからの方が封印の難易度や必要な魔力量は下がる。手っ取り早いのは間違いないわ。』

「・・・なるほど。高町さんがいるからか。」

『そのとおりね。』

響は考えた。

さて、どうしよう?と。

響は知らぬことであるが、物語的にはネコのジュエルシードを回収するのは田の前の少女である。

山田君は下手に手を出すつもりはない、非介入派。下手に話をこじらせたらエンドティングが変わると考えているため、山田君は手を出しつもりは無い。

この結末に変更は無かつたはずだった。しかし。

しかし、響としてはきっと高町さんが手に入れるのだりうと考えている。

これが一つ田の勘違いを発生させた。  
よってこのやうなことを言へ。

「君に手に入れることは出来ない。

さつさと去つた方がお互いのためだ。」

「・・・関係ない。私は手に入れなければならないのだから。例え2人が相手でも！！」

次に問題なのがここで山田君の最悪の勘違いが発動したからだ。

「・・・なのはつ！！

あいつにジユエルシードを渡すなっ！！

きつとあいつはジユエルシードをお前達を惚れさせるために使う氣だつ！！」

響は内心なんですとおおおおおおおおおつ！？

と自分のことを言われてるはずなのに、自分が一番驚いた。

山田君は響が泣きながら帰つたところを見て、「あいつもいい加減、気づいたのか？」と考えている。

しかし、こうした勘違い系、もしくは自意識過剰系のチート人間がそう簡単に心変わりするはずないとも考えている。

彼の趣味はインターネット上の魔法少女リリカルなのはの一次をひたすら読むことだつたため、そうしたところから先入観が生まれていた。

改心するはずが無いという。

その結果、この誤解に響いたのだが。

「まさかっ！？」

確かにジユエルシードには願望器としての能力があるけど・・・  
「なぜそんな思考に・・・」

ユーノが戦慄した様子で語る。  
響も戦慄した様子で語る。

アイシテルは不謹慎だが、笑いを堪えていた。

もちろん響は響で間違いを正そうと声を上げようとしたが、そこで鎌を構えた（ギャグではない）フェイトが切りかかってくる。

慌てて剣で受ける響。

お互いの武器がぶつかり合ひ、鋭い擦過音が鳴り響く。

「・・・そんなことのためにジュエルシードは渡せない。」

「いや、ちがつ！？ がはあつ！？」

「つーー？」

今度は背後から砲撃がぶち当たる。

なのはのブレイクシユートだつた。

フェイトは戦いに慣れているため、常に他の一人も視界に入れていった。よつて避けられたが、響は実戦は実質初めて。気配とか魔力で背後の攻撃を察知するなんていう高等テクニックが可能なはずもなく。きりもみしながら数百メートル吹き飛ばされる。

「・・・どうしてそんな酷いことを考えられるの？」

そんなことで好きになられたつて嬉しくないと思う。考え方直してよ。すずかちゃんがやたらといい人だつて言うから・・・どんな人だと思つてみれば・・・酷いよ。」

酷いのは背後からためらいもなく打ち抜く貴方じゃないだろうか？  
と言いたかつたが、響は苦悶の表情を浮かべるだけ。  
予想以上にイタイ。  
身も心も。

『非殺傷設定をオンにしてないみたい。

そこまで使えないのか・・・それとも少し痛い目にあわせたいのか・

・』

「前者である」とを願うわ・・・本当。」

『つー?』

後方つー! 気をつけてつー!』

「また後ろかいっ! ?  
ぐがあつ! ?」

またもやきりもみしつつ吹き飛ぶ響。

地面に墜落し、バウンドしながら土にまみれる。

「・・・あいつ。」

『あれは・・・NARUTOの万華鏡写輪眼ね。  
この世界はあくまでも魔法少女リリカルなのは。万華鏡を魔力で再  
現してゐに過ぎないのでしょうけど・・・それでも脅威よ。』

「・・・厨一だな。」

山田君は田を異様な紋様に変えつつ体につつすらと紅いオーラを纏  
つてゐる。

NARUTOという漫画にて体を覆うように展開する人型のオーラ、  
スサノオである。その剣のなぎ払いを受けたのだろう。  
切れなかつたのはそれだけ鎧が頑丈だということ。響としてはほつ  
と胸を撫で下ろす。

右には。

左に山田君。

後方にフェイント。

なぜこんな状況になつたのだろう?

響は泣きそうになりながらもこれもまた自分の昔のアレが原因かと思  
いつつ。ため息を吐きながらここから逃げることを考える。  
自業自得とはいえ、これは酷すぎる気がしないこともない。

「これが乙女を傷つけた罪か。

『逃げるの?』

「・・・逃げちゃうひつじっく?』

響は逃げることにした。

## ボウられて酷すきて

「逃がすわけ無いだらう。いい加減にしてくれ。」

「つー？」

背後に瞬身の術で回った山田君のスサノオによる一撃。

剣で受けけるが剣はいつもたやすく折れ、地面に呑きつけられる。

「いつつだああああつー？」

『私を使いなさいー！』

『いいつ・・・本気で殺す氣よつー！』

「殺すつもりはないつづーの。だけど、殺す一步手前までは・・・  
ね。」

「だから誤解だと・・・」

「演技は必要ない。」

響はため息をはぐ。

演技だつたらどれほど良いか。

「なのは達を謀つた罪。さすがの俺も怒髪、天を突くつて感じなんだわ。」

「・・・そいつは結構なことで。」

「いつちやあなんだが、いい加減にしないと殺すことも考えている。」

「貴方・・・ためらいが無いと思つたら・・・人を殺したことがあるのね。』

「・・・んまあな。この世界でなのは達にかかる理由は無かつたし。』の力で簡単に就職を。とか思つて、管理局勤めだったわけだが・・・まったく。なのは達が危なっかしくて見てられないから・・

・ついに。」

なんだかんだで巻き込まれる。

響はこんな時だが、こいつ、オリヌシ臭いと思った。

そして同時になんて羨ましいんだと思った。

望んでないならその立場を分けて欲しいくらいだ。

「・・・内臓をぶちまけて死ねばいいのに。」

「・・・一応言っておくが、なんだかんだで俺はなのは達が好きだ。  
オマエの思い通りにはさせないからな。」

「・・・もうそれでいいです。」

響はシユーターを開。

放つ。

が、それらは全てスサノオに阻まれる。

「ふん。勘違い系主人公ってのは本当に迷惑なものだな。」

「・・・。まつことその通りだと現在進行形で実感してる。

カートリッジロードつ！！

・・・降りかかる災厄を

わが身に宿し

全てを屠る天上の剣・・・

『加減は不要つ！ぶつ殺すつもりでやつちやえーつ！！』

響の周りに黒い魔力が集まる。

巨大な魔法陣が展開され、魔力が収束されていく。

「ディザスター・ブレイカー！！」

巨大な黒い奔流が山田君を包み込む。

「ちつ！天照っ！」

それが黒い炎で焼き死べくされた。

「なつ！？」

「・・・ふつ。やつぱり天照は魔力消費量が激しいな。ま、それはともかく。

・・・俺としては今回のPT事件もハッピーエンドにしたいと考えている。

そのためのチートも用意してある。転生時にな。

アリシアテスラロツサを生き返らすため。

本来ならこつそりと助けるだけのつもりだったのに。

「・・・」

響は言つてゐる意味が理解できなかつた。

当然である。原作を知らないのだから。

それよりも目の前にこいつにボロられたくない。

それが思考の大半だ。誤解で痛い目に遭うとか。いや過ぎる。

つかこつそりと助けるとか。

後でばれて主人公組みの好感度が「言つてくれれば良かつたのに・・

・まつたくちー君つたら。」みたいな好感度アップフラグですね。わかります。

ますますオリ主くさいと思つた。

「どうせハーレムを！とか思つてゐるんだろ？俺からしたら下りん。

いい加減なのはを困らせるのはやめろ。

オマエを見るたび泣きそつた顔を見るのは辛い。」

「・・・」

響も辛いです。

現状がもちろんのこと、そこまでのものだったとは思わず。

「それとテバイスも没収だ。よこせ。テバイスを渡すなら勘弁してやろう。」「・・・。」

響は考えた。

響にとつてなんだかんだ言つてもアイシテルは良き相棒である。なのはとの一件で落ち込んだ響を励ましてくれたのは母親の文香とアイシテルだし、なんだかんだで嫌つては居ない。

そして響としては可憐な美少女の喪失は世界の喪失と同義。彼女たちに関わらずしてどうやって将来の嫁を探すことが出来るのか。

もちろん昔はハーレムを目指していた部分もある。が、今となってはただただ彼女が欲しい。嫁が欲しい。それだけである。

別にその辺の女の子でもいいのだが、響としてはやはり原作組みの女の子とお近づきになりたい。

その辺の女の子でいいなら別に前世にもいた。

しかし特別優しい女の子。

原作組みはそれが顯著だ。

だからこそ彼女たちを嫁にしたかったといふのにこの状況。なぜ敵対してるのだろうか？

とりあえず出した答えは、逃げ出すということ。

やたらと敵意を向けてくる彼を見て、難易度が上がったなあとか思つてゐるが、それ以外の選択肢は不思議と思い浮かばなかつた。

いや、思い浮かぶはずも無いのだが。

ここで返り討ちにしたとしても悪者だし、ここで負けて痛い目を見るのも嫌だ。

殺す一步手前とか。

味わったことは無いが、死ぬほどなのに死ねない痛み・・・みたいな感じだろう。

そのためにはここを呑き潰さないといけないらしい。

なにはともあれアイシテルを渡すつもりは無い。

彼女はデバイスとかいう道具ではなく、唯一の友達なのだ。

「やるんだな？」

・・・せっかく見逃してやるつってんのに。オマエみたいな馬鹿はなまじ力を持つから粹がる。デバイスは確実に奪わせてもらうぞ。

「一応、俺がこの世界にきたのはハーレムを作りに来たわけだからね。そのハーレムを妨害するというなら黙つてられないな。」

挑発をする響。

誤解でボコられそうになつている彼としてはこれくらいは言つて当然。

むしろ相手を直接的に侮蔑しないだけ、響のビビリ具合が見て取れる。

しかしその内容はさらに誤解を深めるだけである。が、どのみち解ける様子が無い以上、意味の無いことだろう。

『・・・馬鹿だけどそんな響が私は好きだよ。』

「ほんとに下らないヤツだな。あきれた。」

山田君が身構えると同時にスサノオも身構える。  
そのまま少しきり結び、時間がかかると思ったのか山田君は距離を

取る。

「オマエは絶対に勝てないよ。

俺にはNARUTOに登場した術や技、特殊能力を使えるチートがある。こんなことも出来るんだ。」

山田君の体から魔力が吹き出る。

「紅い化け物？」

山田君の全身の皮膚が捲れ飛び、真っ赤となる。そして尾が6本生えていく。さらには周りには骨のようなものまで浮き上がっていた。

「九尾の六本形態。知ってるか？」

「つー？

「はあつー？」

踏み込みと同時に衝撃を感じる。

そのまま、きりもみしながら吹き飛ぶ。

『良くきづもみする田ね。』

『んなこと言つてる場合じゃないつー！』

アイシテル、フォルムチェンジ形態変更！－

『了解！』

鎧が霧散し、服が展開する。

その服はヒラツとしてまさに近接戦をする魔法使いといつ感じである。

標準装備から高速戦闘用に切り替えた形態である。

「ブリッジモード展開！！！」

『またまた了解！！』

ブリッジモードは高速機動戦闘用の形態である。

アイシテルのフォームチェンジはフェイドやなのはのようにデバイスではなく術者のバリアジャケットの変更を行い二種のバトルフォームをとる。

先ほどまでの防御型兼汎用型。

今の鎧を剥いだ攻撃型兼速度型。

響の体から黒い魔力が迸る。

響の魔力ランクはS<sup>+</sup>。

たまたま膨大な魔力を内包して生まれたのは単純な幸運<sup>ラッキー</sup>である。

「じつ！」

またもや超速接近してきた山田君をひらりとかわして、ナイフを叩き込んだ。

「カートリッジモード！！！  
クロスブレイドシート！」

厨「くわー之前はなのはの世界なりではある。

ナイフによる双刃が叩き込まれ、山田君が地面に叩きつけられるがすぐに体制を建て直し、周りの魔力すらも集め、山田君が砲撃を放つ。

「尾獣玉つーーー！」

「当たるかつーーー！」

二〇一

「う！」

響を狙つた砲弾はなのはと戦うフェイトへ向かう。

卷之五

-۲۷۱-

山田君は間に合わず、響が急いで間にに入る。

「アイシテルッ！！」  
『分かつてゐつ！！』

# カートリッジロードツー！』

「はああああああ！」

三一堂

瞬時に万を越えると思わせるほどの剣閃が山田君の砲弾に飛来する。そして爆発。

余波を受けたフェイトは吹き飛び、なのはも吹き飛ぶ。

爆発の中心地に近い響にハリノシヤケツトが破れながらもなんとか防御する。

しかしその頭上に影がかかる。

「一応礼は言つておく。助かつた。が、慈悲はかけん。」

フウノミヤ

下手をすればなのはも巻き込んでいたのにも関わらず、その動搖

を押し隠し、すぐに戦いの組み立てを行う。

失敗したからといってそれにいちいちショックを受けていたら、き

りが無い。

割り切ることの出来る人間。

アイシテルは警戒を高め、響のサポートをする。

『戦りなれてるのねつ！－！

プロテクショントー！－！』

「無黙つ！－！」

さうして尾獸玉を放つ山田君。

直撃を受けて墜ちる響。

「があああああつ－？」

『きやあああああああつ－？』

土の柱を作る。

そして降り立つ山田君。

なのはは少し恐怖を交えた表情で山田君を見た。

「・・・ちつ。調子に乗りすぎたな。」

とぼやく声は小さく誰にも聞こえない。

「ちー君？」

「ああ、そうだよ。なのは。俺が怖いかい？」

全身紅い姿。

田は丸く向きて怪しく光り、6本の尾は次の獲物はまだかとでも言つよつてうめこっている。

しかしその田は距離を開けられる」とに対する恐れを内包していた。

なのはは首を振る。

「ううん、そんなことはないよ。ちー君だから。」

「・・・ありがと。」

軽いラブコメもどきを繰り広げている山田君に爆発して死に腐れと言いたくなつた響であるがそんなことを言つのも辛いほどの一撃を受けた。

「・・・ちー君、それはやり過ぎじゃ・・・」

なのはが血まみれの響を見て言ひ。

「ああ。分かつてゐる。申し訳ない」としたよ。加減が難しかったとはいえ、やり過ぎた。

今治す。・・・さつきの借りがある。今回は見逃す。一度と余計なことはするな。」

山田君のチートによる医療忍術で傷が癒える響。

ここで反撃をしたとしても完全な悪者だ。

結局ボロられることになつた響である。

ちなみにさつきの砲撃はフェイントに直撃したとしても問題は無かつた。

山田君の魔法は敵対者以外は極端にダメージを減らすというチートを貰つている。

強大な力を願うだけではなく、それによる周りの被害も考えている山田君。つくづく良い人感が出てる。

今更であるが山田君のチートは魔力によるNARUTOの世界の忍術の再現と魔力ランクSSS+。

さらに味方に対するダメージ緩和効果といつも都合能力。この二つ

である。

「・・・。」

響はなんだかどつでも良くなり、なのはの警戒の入り混じった視線を背に受けて泣きそうになつたがそれを押しとめる。

「・・・。」

もう印象の回復は望めないだろ？

「・・・。」

よつて、響は何も言わずに立ち去る。  
響の目標がここで変わる。

せつかくのおっぱいチート。

せつかくのイケメンチート。

せつかくのテバイスチート。

全て嫁を——あわよくばハーレムを作ることを念頭にしたチートであった。

が、それらを全て。  
目の前の男にぶつけにした。

「いざれ貴様の胸を必ず揉んでやるからな。」

意味不明な捨て台詞を残して去りいく響。

シリアルスなのに、正直失笑物である。

あまりの意味不明さに山田君は首を傾げ、なのはは身を縮こまらせた。

あの一件を思い出したのだつ。

響は再度内心で憤慨しつつ、高町さんをびびらせたかつたんじゃないのにと考えながら空を舞う。

ちなみになぜ操むと言ったのか。

響のおっぱいチートは自在に胸を操る。胸を出現させ、男にとっての最高の嫌がりをしてもやれりとしたのだが、もしかするとこれがはじも無く。

その間、フロイトはちやっかりジュエルシードを回収。響と山田君の魔力や技術を鑑みて、一番効率のいい方法を取つていた。

## アイシテル、愛してゐ

「…………はあ。」  
ため息が出る。  
それもそのはず。  
響は憂鬱である。

「…………どうする?』  
「…………何が?』  
『もう彼女たちに関わらなくて良いんじゃない?』  
「…………ですよね。』  
『氣分転換に温泉にでも行く?』  
「…………そうですねー。』  
『そんな泣かないでよ。』  
「…………』  
『黙らないでよ。』  
「俺、何しに来たのだろうか?』  
『誤解したり誤解されたり、ふんだりけつたりだもんね。』  
正直面白 いから私的にはいいんだけどさ。』  
『そこは一応でも本音を隠すところだよな?』  
・・・まあいいけどわ。事実滑稽なことになつてゐには違ひない。・  
・・・ぐず。』  
『それより田村さんのパジャマをむつてビビつたの?』  
『どうやつて返そつかと思つて。』  
『それを口実に謝るとか?』  
『うん・・・・まあ。』  
『止めといたり?』

あれだけショックイングなことになつてゐる上に響の前の性格からくる

と、近づくためのキャラを演じた・・・と思われると思つよ？

それに田村家ならパジャマの「せー」つ、すぐ買い直してると思つよ？

う。』

「シヨウキングな方は100パーセント貴方のせいですけどねーーー。』

『ちょっと盛場のさせ方に凝つただけじゃないの。』

「それが今の状況を招くキッカケになつたと思ひよ、俺。・・・遅

かれ早かればれることになつてたと思つけど・・・。』

『過ぎたことをぐちぐち言わない！

・・・私だつてさすがにふざけすぎたつて反省してゐからーーー。』

「・・・はあ。温泉。行こうか。』

『よしよし。それでいいのだよ。』

「・・・。』

いつもして響達は温泉に行くこととなる。

またもや彼女達と会つとこつ事も知らす。』

母親の文香と温泉旅行に来た響。

早速、こそりそ隠れることになつた。

「母さん、ちよつと商店でお菓子買つてきて良いー？』

「あら？おなか減つたの？』

「うん。』

「あまり沢山買つたらダメよ。晩御飯が食べなくなるからね？』

「分かつてるよ。』

とこつやり取りの後、さつそく商店に来た響。だつたのだが。そこにはきやきやつうぶふと楽しそうにましゃぐなのは達。

「・・・狙つたと言うわけでは無いだろうな?」

『ノン!と應えておくわ。私もちょっとびっくり。』

「ていうかオマエは原作知らんのか?』

『・・・んー私つてほら。快樂主義者?』

じやちょっと意味が違うかな?』

面白いいかどうかが第一だから、先に結末知つてたらつまらないですよ?』

というわけで特に聞いてません。』

「・・・使えないな。』

『響もね。』

「俺も使えないな。』

『分かつたみたいで何より。』

『フォローしてくれ。・・・パジャマを返すべきだろ?が?』

『またそれかい。てか持つてきたの?』

「・・・一応、なんか持つてると安心して。』

『傍目から見ると変態よね。少女のパジャマを持ち歩く男・・・キモ。』

「・・・ひむさい。自覚はしてるが、いまだ未練たらたらなんだ。もってたらなんか月村さんが“頑張つて!響なら出来るよー”といつてくれる気がする。』

『ちょっと様子見ていく?』

「・・・スルーか。』

『幻聴乙。惨め過ぎてデバイスの私も涙が流せるレベル。』

『流して見せる。』

『比喩表現だバカヤロー!』のやうー。』

「・・・分かつとるわ。』

『ほら、アホなこと言つてると見失うぞ。』

「・・・うん。』

響もアホらしくなったのか、アイシテルとの会話を切り上げて付けていく。

ちなみに憎<sup>へへ</sup>きあの男。

山田君もいるではないか。

こつそり「ディザスター・ブレイカー」で打ち抜いてやるつかと思ったのだが、さすがに人の目がありすぎるしそんなことしたら殺されるかもしれない。

うん。不意打ちは良くないよね。

ビビリの響は怖氣<sup>へい</sup>づいた。

「あいつら早速温泉に入るみたいだな。」

『そうみたい。 ていうか、こいつして見ると山田君、モテてるね。』

「・・・。」

『爪。痛くないの?』

「・・・え?」

おわっ!?

いだあだだだあああああつ!?

あまりの憎しみでつい壁に爪を立てていたせいか爪がはがれかけていた。血も出ている。

こんな時に便利なのがおっぱいチートである。

胸を揉むことで体の傷含めてリフレッシュ!

・・・自分で自分の胸を揉むと言う残念な絵柄に対しても突っ込んではいけない。

おっぱいチートには三段階のレベルが存在し、第一が単に胸を弄る(もとい体の形態変化)、第二が胸を介しての治癒。これは第三が時の逆行による不老化。(原理的には第一も一緒に時の逆行による治癒だつたりする。)

若返らせたりも可能。その逆もまた可能。

強力なチートである。が、からず胸を揉まなければならず、ソレ

相応の魔力を消費する。

不老化を使う場合、魔力によって効果年数が決まる。響の全魔力を込めても約1年しか効果が持たないという微妙に残念仕様である。

「ふと思いついたんだが・・・」

『何?』

「このチートで成長、もしくは若返りをすれば問題ないんじゃないだろうか?」

『でも、山田君にはばれると思つよ?』

『そうなれば無駄に手の内をわらすだけになる。』

『また山田君かっ!』

『つくづく邪魔者だな!! あいつはっ!!』

『でも・・・おっぱいチートの第一段階を応用すればバレナイかも。』

『なんだと!?』

『あれ、胸を弄るってのは結局のところ体の形態を弄るってことだから・・・女になつたり、全く別の生物になつたりが可能だと思う。それこそ昆虫にだつてなれるはず。』

『なつ!?

そ、そんな便利機能がつ!?

『でも・・・胸や手が無い生物に変身しちゃうと戻れなくなるから気をつけて。多分、一度なつちゃうとどんな手を使っても戻れない。神様印の能力だし。』

『なつ!?

そ、そんな恐ろし機能がつ!?

『私も詳しく述べ知らないけど・・・胸を揉むチートだから揉める様な胸が存在し、なおかつ胸を揉める様な手があり、胸に手が届く動物・・・ネコや猿とかそんなところかな。・・・ま、おっぱいチートの“おっぱい”が人間のみなのか動物もありなのかまでは分からぬけど。』

一  
ほう?

ならばネ「に・・・でも最後の一言が怖いのでやめとく。」

「アーティスト」

「やがましいつ！？」

『じやあ女体化いつとく?』

「酒を誘うノリで女体化を勧めるなっ！！

卷之三

「あの牛で可か氣落ちしてゐるがな」とか思

うとも感じてないみたいだから良いや。」

悲しき理由

「……言うな。俺が一番悲しい。数田で忘れ去れるまでのシミックだったってことだらけ。」

『ショックを受け続けてもこつちとしては申し訳ないけど、もう少

卷之三

『多分、山田君が慰めたとかじゃないの?』

死ねばいいのに

いにい  
くが書一干和力ににいるかられ  
安心しなさい

「・・・アイシテル・・・」

響、ほら、お菓子買うんでしょ？

介入しないならしないでとつとと去つておいたほうが無難よ。』

オマエ、勿れ!!

ה'ענ-!

卷之三

唾液が一ぐから私にキスするなああああああ!!』

בְּנֵי יִשְׂרָאֵל

『うわー！…あやまつ、うわー！…』

その温泉の旅館ではナイフを模したアクセサリーにちゅうちゅうしながら「愛してるウウウウウウウウウウウウウウウウウウ！」と叫ぶ子供がいる三世代ほどで渡るまで語られたとかないとか。

シユールである。

その後、ジュエルシーの反応があつたが、再度皆から敵対されるのは目に見えていたので響は何もせず温泉を楽しんだのであった。

「あいつ・・・何しに来てたんだ？」

・・・不気味なヤツだな。」

何気に感知技で響に気づいていた山田君。

こちらをじろじろ介入したそうに見ていたくせに何もしなかった。このことで何か企んでいるに違いない、と山田君により警戒されるのは言うまでも無いことだろう。

こうしてさりに誤解は深まるであつた。

誤解が深まっていくのは最早彼の天命であるのかもしれない。

## アイシテル、愛してゐる（後書き）

「ひひりで誰もがわかつたと思いますけど、アイシテルの名前は「愛してゐる」のカタカナ表示です。

もともとは愛してると打ち込んだのが、アイシテルとカタカナ変換され、それを見て「これ良い名前じゃないつー？」とティンと来たのが始まり。

さらにはそのアイシテルの名前からこの物語の大筋もティンと来ました。

え？ 変な名前？

H A H A H A H A

このセンスを理解できない無いなんて、ちょっと頭おかーーげふんげふん。

冗談です。

さらに言つと物語の大筋が出来るのと同時にちゃんととした理由付けもティンと来てるんですよ。

それはまあ見ていればなんとなく分かるかと。

この作品のメインテーマでもあります。

え？ 原作ヒロインとのラブラブはテーマじゃないのつー？ つて？

大丈夫。ラブコメは僕の生き甲斐ッスから。

それだけははずさねえつ！！

## 初めてのミッドチルダ

響はと言つと。

管理外世界のミッドチルダへと来ていた。

『え？

なんで？』

「今更過ぎる疑問だな。アイシテル。」

『うん・・・まあ。』

「ふふふ。どうして？」

「うつ思つたことだらう。」

『・・・うん、まあ。』

「せり、聞いてじりん？」

「じつじてこんなどこに来たの？って。  
かもーん。りつすんみー。」

『「つやキモいつてこうこうのを言つのかな？』

「そんなことを聞けとはいつとらんつー！」

『・・・はいはい。で、どうしてミッドチルダにまで来たの？

地球、ほつといてよかつたの？』

「ふふふ、良くなぞ聞いてくれた。」

『聞けつて言づから・・・面倒くさこな、もひ。』

「簡単な話だ。」

俺のことを誤解しまくるバカドモなど知つたことかっー！

という真理にたどり着いたのだー！

『・・・それで？』

「は？」

『オチは？』

「いや・・・あの・・・」

『オチは無いの？』

「えと・・・その・・・あれだよアレ。」

『無いのね。つまらない男は嫌われ——』

「いや、待てっ！――

それで俺は気づいたんだよっ！――

『何に？』

アイシテルはもちろんオチなどないことは気づいている。

理由もきっとなんとなく前々からアイシテルに聞かされ、興味が深かつた魔法の世界というものの典型。ミッドチルダ。ここに来てみたかったとかそんなところだらう。

端的に言うなら響をちょっと苛めて楽しんでいたのである。

余裕綽綽である。

しかし、次の響の一言で爆弾を投下された。

「アイシテルを人型にするのだっ！――」

『え、？』

「俺はアイシテルが好きだ。

前回の一件でアイシテル以上の女はいないと気づいた。

なればこそ――

おっぱいを揉んだりしたいっ！――

え、えええ、えっちなことかもしたいっ！――

だが、残念ながら、アイシテルはデバイスだっ！――

おっぱいも無ければ股間もない。

さらに言えば、むちつとした足も手を繋ぐための手も無い！――

その可憐な笑顔であるう顔を見る術もない！――

だからこそ・・・そうだからこそっ！――

俺はアイシテルの改造方法を知るため、ミッドチルダの無限書庫とやらに行こうと思ったのであるっ！――

『ふええええええええっ！――？』

「驚いてる声も良いつ！――

ああ、これに表情が付けば、その笑顔や驚く顔で俺は昇天してしまった。

『うだろうつーーー！』

『ば、ばか言つてーーー』

『俺は結構本気だつーーー』

『・・・ま、また好きとか言つて・・・その、私テバイスだよ?』

『問題ない。仮に入型になれなくともなつーーー』

『私・・・入型になつても子は残せないと思つよ?』

『ふつ！』

愚問だな。

それもまた問題は無い。些細な問題だ。』

『からかつてる?』

『ふざけて愛の告白をするほど落ちびれたつもりも無いーーー』

『・・・・・』

『アイシテル?』

『・・・別に。勝手にすればいいじゃない。』

『えーっと・・・告白の答えとかは頂けないんでしょうか?』

『いや。』

『え?』

『イヤだつて言つてるの。』

『な?』

響が泣きそうになる。

『情けないし、ビビリだし、逃げ腰だし、誤解されやすいし、アホだし、馬鹿だし、少しナルシ入つてるし、イケメンといつても見た目だけだし、魔法の腕も下手だし、戦闘も弱いし、おっぱい揉む揉むつて下品だし。銀髪でオッドアイで気持ち悪いし。』

『・・・ぐずり。』

響はためざめと泣いてしまつた。

『でも・・・その・・・ずつと私を好きで呢てくれるって言つなら・・・考えてあげないことも・・・無いよ?』

無いよ?のあたりで響の眼下には黒髪黒目の中年女性が小首を傾げて頬を軽く染めながらこちらを上目遣いかつし目で見てくるような幻視が見えた。

鼻血を垂らす。

『ど、どうしたの?』

「いや、なんでも・・・。でも本当にいいの?  
そのあれだけ言つておいて・・・」

『なんだかんだですっと見てきたんだから。  
貴方がどういう人間かは分かつてゐつもり。

・・・デバイスを好きだつて言つほどの変態だとは思わなかつたけど・・・別に悪い気はしないし・・・どうせずっと一緒にいるんだから隣にいる形として、デバイスとして・・・道具としてじゃなくて・・・恋人として大事にされながらも悪くないかなあって・・・

「あ、あいしてるう・・・」

『キモイから鼻水拭いてよ。

もつつ!』

「すず、ごめん。』

『ちゃんと惚れるような男の子に成長してよ。』

「うん!』

『まかせとけっ!』

『まかしといたら不安だから私も手助けするけども。』

「・・・あいかわらず一言余計だな、オイ。』

『それで、無限書庫に入るんでしょ?』

身分証明とか大丈夫なのかな?』

「ふつ。安心しゆ。

俺は出来る男。

そこで身分証明書を売つてゐるオツサンから結構な高額で買い取つた。この世界に来て稼いだ金がぱーになつてしまつたが、これもアイシテルのためを思えばこそ。

痛くも痒くもない。財布には痛いけれど。

『・・・怪しいとは思わなかつたの?』

「何が?」

『・・・もういいわ。どうせ通れないだらうし。』

「何を言つてゐんだよ?

そろそろ行こうぞ。」

『はいはい。』

もぢろんのこと。

「だ、騙された・・・。」

『でしょ?』

「良い人だつたのに・・・」

『身分証明書をその辺の人々に売つて歩く人間が良い人なわけないでしょうに・・・馬鹿のまじや、お嫁さんになつてあげないよ?』

「ま、まてつ!」

今のは何かの間違い、手違いで・・・

『言い訳しない。』

とつとと次の手段を考えて。』

「・・・うん」

ちなみに無限書庫には普通に立ち寄せた。

変な身分証明書を見せたがために引き止められただけだったので

る。

「なんという無駄金。」

『アホ過ぎる……』

「まあ……高い授業料だとでも思つて置いて。」

『やつでなきややつてられないわよ。』

無限書庫で調べていくと、デバイスの擬人化。もとい人化は現在ではほぼ失われた技術だと言われている。

現存する人型デバイスは全てユニゾンデバイスといわれ、デバイス単体での戦闘やデバイスを術者が展開した場合の戦闘力の飛躍的な向上から需要や研究は盛んにされているものの、未だ一般化できるほどの報告はないとのこと。

現在は一部の試験機が研究所のいくつかに点在してゐるのみで、もちろんのことそういうたところの技術が外に漏れるわけもなし。早くも手詰まってしまった。

「どうしよう?」

『氣長に見ていくしかないと思つよ?』

「この……図書館ですか。」

響は無限書庫を見回し、げんなりする。

「……とてもじゃないがそんな気にはなれない。」

『魔法を使えば?』

「どんな?」

『グーグレ先生っていう魔法があつてね……』

さつそくその魔法で検索をかけてみると検索に引っかかった本がひとつでにやつてきた。

やつたね！グーグレ先生！！

「便利すぎる。」

『ほら、とつとと読む。私を人にしてくれるんでしょう？』

「おうともおう！」

日が暮れるまで読み続けた響であつた。

一ヶ月後。

「こ、これがあつ！！

ふむふむ・・・なになに？

古代ベルカの夜店の書？』

『それだと訳し方が違う。

私に良く見せて。』

「うん。はい。」

『えーっと夜天の書・・・なるほど、確かに。夜天の主に守護騎士・  
・・か。』

「で、結局どうすればいいの？』

『この手法だと、まず私の本体はナイフであることには変わりない。  
それとは別に依り代を用意する・・・人形に私の魂を移すつて言つ  
た方がわかりやすい？』

「へー。」

『ナイフは心臓代わり。依り代は死なない操り人形つて言つてもい  
いかも。作るのに半月はかかりそう。』

『・・・ふふふ、ようやくアイシテルと抱き合える日が・・・  
・・・まだそこまで許してないんだからね。』

「それを許さない」と庇ひまでだつてこうのせつ！？

『て、手を繋ぐ？ それくらい。』

「なつ！？」

「なんという生殺しかつ！！」

俺がアイシテルに惚れてるのを知つてゐくせに！？！..

『う、うるさいなつ！？

私だつて初めてで恥ずかしいんだからそんなことこきなりできぬよつ！？

「・・・・・うぐぐ・・・恥ずかしがつてると嘔ひなうばまあ・・・許

そう。」

『何様よ。嫌いになるよへ。』

「じめんなさい。」

『よひしこ。』

とこうわけで。

さらに半月後。

『・・・・上手く行かないなあ。』

「うーむ。」

意外と難しかつた。

それは当然。

仮にもミッドチルダを始めとした全次元世界の研究者がこぞつてコニゾンデバイスを作りうとしつつも汎用化には至つていないのである。

いぐりチートデバイスによる作成とはいえど簡単なことではない。

『とりあえず一回帰る?』

文香ちゃんもいい加減心配してると思つよ?』

「・・・それもそつだな。必要な材料はすでに買い込んであるし。』

ちなみにニニシードナルダのお金はフリーの魔導師として稼いでいる。ちよつとした家が買えるほど稼げたのはひとえに響の魔力的な才能とアイシテルがあつたからこそだ。

『あら? もう帰つたりやうのね?』

『ええ、またこつちに来た時はようしきお願いします。』

『はい了解。気をつけて帰つてね。』

『ありがとうござました。』

今通信している相手はリンディ・ハラウォン。なにやら最近、事情のある子供を預かり、その子供と家族の裁判があつたとか。

もといテスタークロッサ家族である。

その家族のことに掛かり切りで忙しいと云ふフリーの魔導師として名前が売れ始めた響のことを聞き、クロノとか云つ少年と一緒に仕事をしていた。

もっぱらクロノが指揮で、響が現場で動くといった具合だ。

さて、原作であるならば彼女は普通に仕事をしつつも裁判に臨んでいたはずだが、ここは現実。

裁判と言つのは法律と言つ名の非常に厳しい決まりがある。例え情状酌量の余地があつたとしても完全な無罪は厳しいと云わざるを得ない。それが社会である。

さらに言えば原作との相違点。

それは山田君によるP.T.事件の介入。NARUTOの漫画には穢土

転生と呼ばれる擬似的に死者をよみがえらせる秘術がある。

それによる反魂でアリシアテスタロッサは生き返り、プレシアテスター・ロッサは憑き物が取れたかのように放心し、ついでとばかりに山田君による「そげぶ」・・・すなわちS（説教して）G E B U（ぶん殴る）によりプレシアは「フェイトを娘と見ろ」と言ひ血のオリヌシくさい言葉を頂いたが、結局それだけは上手くいかなかったらしい。

そんな経緯の元、テスター・ロッサ家族を助けるために奔走しているのがリングディというわけだ。

もちろん原作ならばフェイト一人分であるのに対し、さうに2人分の処理が待つていて。

もともとはプレシアは管理局に命じられた実験のせいで娘を失ったことが原因であることもあってなんとか軽い罪にまで押さえ込めそうなのだが、もちろんそれには多大な面倒ごとがある。

そこで頑張る以上、仕事にかまかける暇は確實になくなるわけで体を酷使したリングディに対し、クロノが艦長代理としてリングディの仕事を全てを肩代わり。とはいへクロノもまた裁判に関することで艦を開けることが多く、それでも難しいものがあつた。

そうなるとリングディの艦の主戦力であるクロノが現場につけなくなるために、その補填としてフリーの魔導師である響が雇われることと、いう経緯がある。

あわよくば人手不足解消のため、響をそのまま雇いつもりでもあつたりもするが山田君が管理局勤めである以上、響は入隊するつもりは無いだろう。

『実物がみれればなあ・・・』

「博物館にあるかな?」

『いや無理でしょ。夜天の書ともなれば少なくとも一級ロストロギア指定は受けただうし、仮にあつたとしても手にとつて見ないことには・・・でいうかアレ、今は名前を変えて色々な主を転々としてるみたいよ?』

「・・・ふう、しようがないか。仮にあつたとしても・・・サーチなんでものをかけたら・・・」

『逮捕ね。』

「・・・気長にやるしかないんだな。」

『残念ね。』

「ま、いいよ。これでもう一つの目標に全身全靈を向けられ。」

『何?』

「聞いてたろ?」

ヤツの胸を揉んで、無駄に巨乳にしてやるのさ。」

『・・・本気だったのね。』

「もちろん。」

『殺されるかもよ?』

「今は腕も上がった。むしゃらひちが殺してやる・・・のは日本人である俺には無理だが、ぶつ飛ばしてやる。」

『いつそのことジユエルシードを回収してそれに願えば良かつたかもね。』

「なん・・・だと?」

『記憶の改竄も可能だつたかも?』

「・・・。」

『泣いたつてもう遅いよ。』

「・・・ば、馬鹿なことを言つた。そんな卑怯な手で自分の犯した責任から逃げるつもりは毛頭

『あ、あんなどこにジユエルシードがー!』

「な、何ツ!?

「どこだつ!?

『・・・責任がなんだつて?』

「・・・。

響はがつくじと膝を付く。

「アイシテル・・・俺に恨みでもあるのか?」

『安心して。好意しかないよ?』

「・・・からかってるのは分かるけど、それでもドキッとしてしまう自分が憎い。」

『・・・結構本気なんだけどなあ。』

「何?」

『なんでも。』

なんだかんだでようやくラブコメを繰り広げ始めた響である。  
相手は機械であるが。

いつして初めてのミッドチルダ旅行は幕を閉じる。

## 初めてのミッドチルダ（後書き）

因みに本来のそげぶは別アニメの「その幻想をぶち壊す（ぶち殺す）」の略称です。

そのセリフを使う主人公的にこの意味でも問題ないかなーと。

## えたーなるりつーたあたつく

地球に帰ってきた頃。響は驚愕した。

帰つて一息と思つたら、いきなり紅い服の柄の悪い美少女に絡まる。

おじいちゃんおばあちゃんのスポーツ。ゲートボールに使うゴルフのパットみたいな物。すなわちスティックと呼ばれるカナヅチを長くした物みたいなのが持つてである。

ちなみにゲートボールとは高齢者のスポーツとして漫透しているが実際はそういう意図なく考え出されたスポーツで、五人一組が基本となる。GBボンバーと呼ばれるいのまたむつみさんが描く漫画ではゲートボールを題材に描かれている。

そんなことはさておき、響は既視感を感じた。そこにはいつぞやの鎌を持つ少女と同じだ。

何かよこせと言われるに違いない。

武器を片手にやつてくる。

ドウ見ても友好を深めようと呟つ氣では無いだらう。もしかしたら愛の告白?とひらつと昔の響の思考が漏れ出たが、そんなことがありえるわけがないとかぶりを振る。もちろんそんなはずが無い。

響は考えた。

今回は何も持つていない。持つて居るとすればアイシテルのみ。また何かの誤解だらうか?

そんなことをのんびり考えながら少女の言葉を待つていると。

「てめえのリンクアーコアを渡せ。」

大人しくしてれば痛い田には遭わせない。」

「は、はあ・・・・

りんかーこあとは?  
なんじやそら?

響の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。

今までの経験的にきっと何かの誤解だろ?と思つた響はまず話をすることにした。

痛い田に遭うのは「メンだ。

「まあ待ってくれ。何が欲しいのか良く分からんんだが・・・りんかーこあつてなあに?」

「ああん?

おめえ・・・それだけの魔力を持つておいて関係者じゃないって言うのか?」

「・・・なんの関係者?

とつあえず何かの誤解だと思つた。まずは落ち着いて話を――――

「まあ良い。

だつたらそれはそれで手間が省ける。」

「・・・いや、自己完結されても・・・きつちり誤解を解いておかないと大変なことになる気がする。ところがどちらと話を――  
一どわあつ!・?」

問答無用で、ヴィータはグラーフアイゼンを振るつ。

一応非殺傷設定であることから面倒になつて『絶ぜられること』を狙つたようである。

・・・ハンマー状の武器を扱いながら非殺傷どころのものになつてゐるのか良く分からぬが。

「ちつ！

運のいい野郎だ。・・・いや・・・その身のこなし。オマエ、やつぱり関係者だろ？

一般人を装つて油断を誘つてところか？  
騎士の風上にも置けねえ野郎だ。

男なら――

『カートリッジロード。  
ラケーテンフォルム。』

グラーファイゼンの無機質な声が響き、少女。  
もといヴィータはデバイスを振りかぶる。

言わずもがな響は騎士ではない。とは言つておこつ。  
結局言つているじやん！というシックロミはナシの方向で。

「正々堂々、勝負しやがれえええええええつ――！」

ブースターが出現したステイック改め、グラーファイゼンがブースターの勢いを得てその尖った切つ先を響に向ける。

響は変形機構を持ったステイックを見て、「なるほど、ステイックに見せかけた尖ったハンマー・・・だつたら良かつたのに。」と勘違いを改め、相手も自分と同じくデバイスを持つ魔導師だと気づく。

『ふろくしょん。』

「ちつ！

「うぜえつ――！」

グラーファイゼンはアイシテルの張つた障壁パリアに阻まれる。

「まてまてつ――！

まずは話を――――

「じゃかあしーっ！…」

「ぐつ！…」

そのままグラーフアイゼンを振りぬくヴィータ。  
障壁を突き抜け、響は瞬時にアイシテルをナイフに。  
それで受ける。

「ぐつ…やるじゃねえか。

腑抜けかと思えば・・・アイゼンつ…！」

『カートリッジロード。

ハンマーフォーム、ショーター。』

ヴィータがどこからか円球の弾をとりだし、それを投げる。  
そして弾をグラーフアイゼンでぶつ叩いて相手目掛けて射出する。  
響はアイシテルをセットアップして、西洋鎧を身にまとつ。

「・・・ちつ！」

『カートリッジロードッ！』

剣で受け、弾き、斬り飛ばす。

黒い魔力が迸り、その剣は黒い輝きを増す。

「暗黒的なエクスカリバー！…」

名前にツッコミをいれてはいけない。

下手に厨二な名前よりはマシだと思われる。

ロングソードとグラーフアイゼンがぶつかり、火花が散る。  
魔力で鍛えてるのにも関わらず、ヒビが入るロングソード。

魔力強化を行つていなければ玉を全て弾いた段階で折れていただろ  
う。

攻撃力が高い。

そう思った。

「はっ！

てめえも古代ベルカ式を使つてんのかつ！！

意外と見所があるじゃねえ・・・かつ！」

「そらどうも・・・いだあああつ！？」

なんつーバカちからつ！？」

「てめえが軟弱なだけだ。」

剣はいともたやすく折れ、響にハンマーが襲い掛かる。  
甲冑がなければそれなりの怪我をしていた。

「・・・ところでりんかーこあつて何？」

「はあ？まだとぼけてんのか？」

それとも本当に分からぬのか？」

「・・・アイシテル、知つてなくちゃ不味いの？」

『別にそんなことは無いと思うけど・・・早い話、魔法を使うため  
に必要な器官のこと。

響はそれを狙われてるみたい。』

『はよ言えよ。無駄な恥かいちやつたじゃん。正直それをお渡しし  
て帰つてもらいたいんだけど。』

『うーーーん。でもリンクカーコアを取られると最悪魔法が使えなく  
なるよ？』

「・・・マジデ？」

『少なくともそれ専用の機関に入院することになるね。』

「・・・そなん？

でも痛くしないとか言つてなかつた？』

『いや、痛いかは分からぬけど……一応内臓の一種みたいなものだからね……なんの影響も無いつてのはちょっと楽観的かな？内臓を引き抜かれて何の影響も無いなんてことは無いでしょ？少なくとも私の知る方法だと後遺症が出るかな……』

「おし、逃げるか。」

『それが上策ね。相手が女の子だとやりにくくもあるでしょうし。「全くその通りだ。』

そんな会話をしつつもヴィータを凌ぐ響。

一応、チートデバイスのアイシテルの性能をフルに使えば勝てることは勝てるのだが、勝つ意味が無い。

それに相手だつて本気でやつてているというわけではあるまい。響も知らぬ奥の手を持つてているかもしれない。逃げるのが一番無難と言つものである。

「降りかかる災厄を、我が身に宿し、全てを屠る惡意の牙  
ディザスター……ブレイカアアアアアアアアアアアアッ！」

周囲の魔力素を急激に収束、圧縮し、打ち出される黒色の激流。

「なつー!?」これほどの大技をこの短時間に…?」

『カートリッジロード。バリアブル。』

ちなみにコレは見た目が派手なだけの田ぐらましであり、ゆえに即発射が可能だつただけである。

まんまと引っかかったヴィータは勝ち誇るが、すでに響はどうぞくと消えていた。

「はっ。見た目に反して大したことねえな・・・って、ん?  
・・・くそつ!!

めくらましかつ!!

あの野郎っ!! 次にあつたら覚悟しろよつ!!」

『帰りましょう、マスター。』

「・・・ちつ、分かつたよアイゼン。はやてが心配するしな。」

こうして逃げただけなのに響は敵対視されていた。

逃げると敵対視されるであろう性格の人間（守護騎士）はもう一人いる。

めげずにがんばれよつ！相馬 韶つ!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1936z/>

---

とあるチートを持って！

2011年12月20日16時55分発行